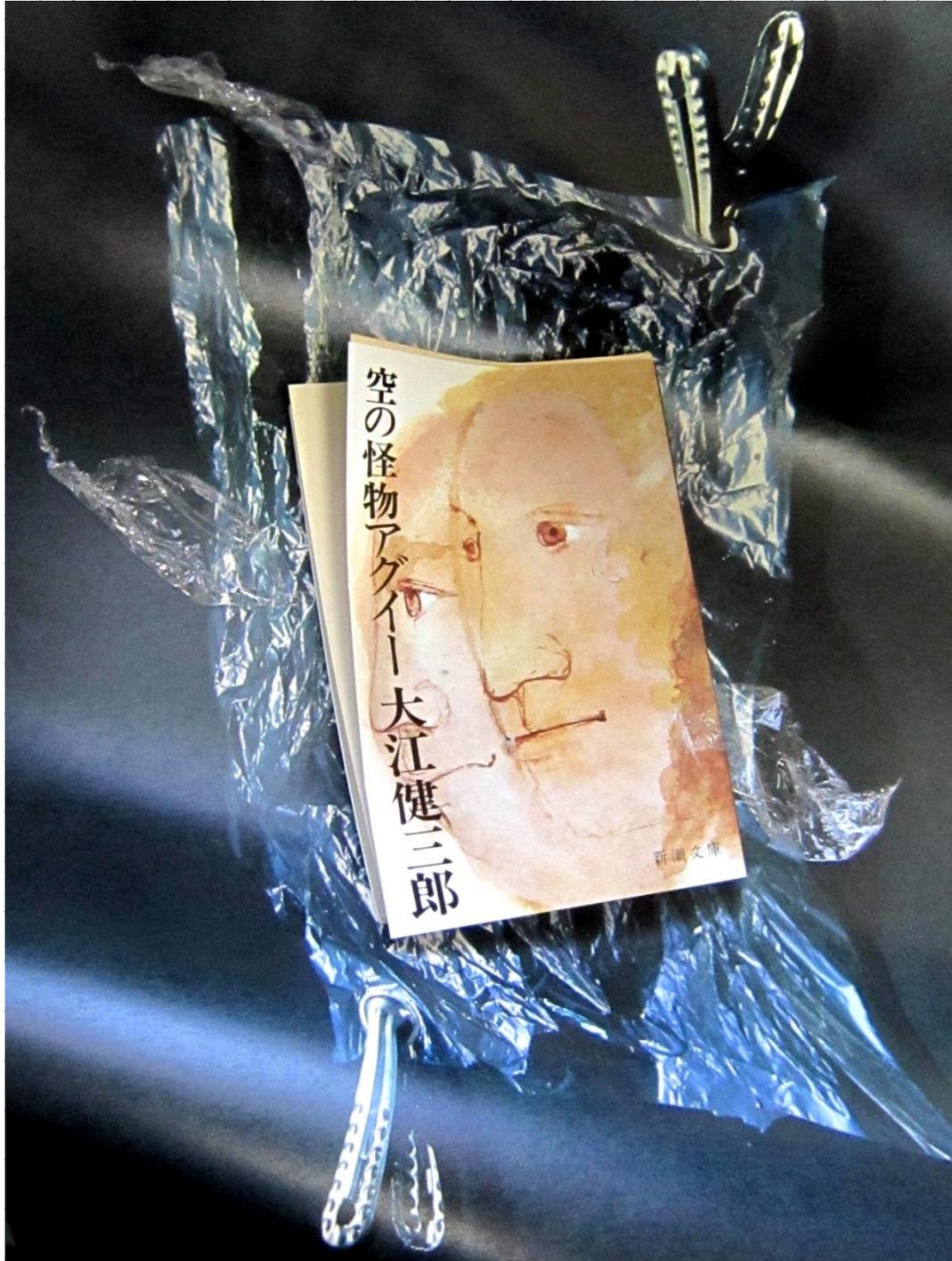


大江健三郎 ファンクラブ通信



本誌について

「大江健三郎ファンクラブ通信」は、大江健三郎ファンクラブの有志で作る会報です。本誌は、大江文学を通じてつながる私たちの活動の「しるし」であり、また、大江さんに向けてこれから書きつづけていくであろう「手紙」でもあります。1冊を製本して大江さんにお贈りするほか、インターネットで公開し、幅広い範囲の方々に読んでいただけるようにします。本誌を目にする皆さんに、少しでも楽しみや喜びがお届けできれば幸いです。

大江健三郎ファンクラブ代表・いとうくにお



もくじ

読書会記録：『性的人間』	3
続・yoshimiのオーケンな日々 / yoshimi	13
庭仕事の愉しみ / イオ	35
大江作品から受けた励まし / タカコ	37
大江文学に励まされた時代 / 真春	39
『我らの狂気を生き延びる道を教えよ』ニューヨークより / 金田善裕	41
ファンクラブ活動報告 / いとうくにお	47
編集後記	47



読書会記録：『性的人間』

日時 : 2011年1月29日 14時～17時

会場 : 早稲田奉仕園 102号室

参加者 : タカコ、HAL、マハル、yoshimi、印南、つる、タムラ、ちゃまん、スヌーピー、いとう

自己の存在確認

(前略)

ちゃまん : 武満徹さんが、「性的人間」が一番好きな小説だとおっしゃっていましたね。



タカコ : ええ、これに書いてあります。あとで見つかったらお知らせします。

ちゃまん : どういうところが好きと書いてありましたか。

いとう : いや、武満さんが好きだから大江さんにも大切な作品ということだったと確か思いました。スヌーピーさん、何かありますか？

スヌーピー : 自分の存在確認って話は出ました？ 孤独は出ました？

いとう : 出ていませんね。

スヌーピー : え、出ていない！(笑) あの、最初の妻が死んだじゃないですか。その涙でJは自分の存在確認をしているじゃないですか。あと痴漢をやった娘の涙でも自分の存在確認をしているじゃないですか。相手の対応で自分の存在を確認しているのじゃないかと。この3作品ともなんですけど、肉体感覚として自分の存在確認をしているのだと思うのです。自分の存在ってなかなか確認できない、ひとりではできない。でも相手の涙で自分の存在を確認しているということですね。あと、気の持ち様って出ました？ 気の持ち様ということを書いてい



てJの最初の妻が死んだのはJがバイセクシュアルだったということになっているけど、そんな訳ないじゃないですか。夫がバイセクシュアルだからって何で自殺するのかって。事実はどうでも良くてJは勝手にそう思いこんでいて、子供も欲しいと思っていて、何かずれています？

いとう : いえ、いえ。

HAL : 存在確認というキーワードは「共同生活」には良く合うものですね。

スヌーピー : そうそう。それと二部のほうの少年が痴漢をすることによって、自分の存在確認をし最後死ぬことに存在を確認しているじゃないですか。これも自分の行動によって存在確認をしているということかと。



いとう : 自分の存在を確認する人たちの話ということですね。

スヌーピー : そう。これはやはり50年前の話なのだ。現代は無縁社会だから情報をたれ流しでツイッター何かをやって自分の存在を主張するじゃないですか。この時は行動によってやっちゃったこととか、相手の反応で確認している。い

読書会記録：『性的人間』

まは相手のことなんか考えず自分のことをたれ流している感じで。

いとう：いまの時代では少年も破滅しないで行けたという。

スヌーピー：というか、破滅というけど結構楽しい小説です。

いとう：J 自身も最後捕まってしまうところまで行くわけじゃないですか。

スヌーピー：小説としてはそうだけど、描いていることは破滅ではなくて存在確認は大事なことで、読んでいくほうにとっては「おお」って。

いとう：J は最終的に存在確認が出来て良かったという感じになっていると。

印南：「共同生活」のほうもというのは。

スヌーピー：結局猿とか虫がいるから自分が確認できるわけじゃないですか。気の持ち様というのも猿とか虫がいると思っているのは青年だけで、気の持ち様と存在確認ということです。これがこの320円の対価です(笑)。

つる：そういう読み方もあるんだ。

性的人間、政治的人間

HAL：大江さんが性的人間と政治的人間を対比して捉えようとしたところには、いまスヌーピーさんがおっしゃった認識というのはあったと思います。



いとう：それは性的なものによって自分の存在を確認するというか、生きている実感みたいなものですね。政治的人間というのは政治に関わるということですか。

HAL：いや、政治ということだけではなくてもうちょっと他者との関係性くらいまで広めてもらったかと思えます。今回は参考にしているいろいろな本がすべてトランクルームに行っちゃっていて、結構いいかげんな話をしているかも知れません。

タカコ：さっき私が言っていた『大江健三郎 作家自身を語る』の中でも尾崎真理子さんが言っ

ているんですけど、大江さんがこう言ってましたね。「性的人間と政治的人間について、性的に牝になった国の人間は性的な人間としてこっけいに被虐的に生きるしかない。政治的人間は他者と対立し抗争し続けるだけだ。この言葉が印象に残っているのです」と、尾崎さんは言っています。

いとう：そのもとの発言はどこにありますか。

タカコ：それは分からないです。

HAL：おそらくは何かのエッセイの中からだと思います。60年代の新左翼チックな言い方をすると、対米従属している日本がまさに牝的な存在であるということだと思います。

タカコ：そうですか。学生運動とかまた別の政治的な状況があると思いますけど。

「セヴンティーン」

いとう：では、1時間ほど経ちましたので次に行きたいと思えます。次は「セヴンティーン」です。私から。十代の



17歳の若い男の子の激しい気分の変化、高揚したかと思うと激しく落ちこんでしまう。もの凄い自意識過剰で、激しい自己嫌悪に陥るといふそのような内面がそういう十代を経験してきた男としてはもの凄くリアルだなと感じました。ちょっと誇張しているという気はしますが、十代はそんな感じだったと思うんですね。そういったリアリティということに加えて最初は左翼がかった子供だった子がきっかけを経て右傾化するということか、180度変わって自己嫌悪にまみれたものが、自信に満ちた狂気のようなものに変わっていく、鮮やかに変わっていく様子が面白かったです。ドラマティックだし、良く書けているなと思いました。特に本の中で「忠とは私心のないことを言う」という言葉に出会ってその思想に感銘して私を捨てることによって自己嫌悪とか恐怖心を捨て去って何か解放されたような人間になってしまう

という、実際そういうことがあるかは分からないですけど良く書けているという気がしました。それで文体が凄く力強くて、印象に残っているのは最初のほうで誕生日にみんなに相手にされず、みじめに落ち込んだなかで「俺は 17 歳だ、みじめで悲しいセヴンティーンだ」とあります。文庫だと 167 ページです。誕生日の夜に自分の部屋のふとんに包まっての独白なのですが、凄く自己嫌悪の中にある自分を更に強調する状況がこのなかで表現されています。それと対になるように最後のほうでまたうって変わった右翼少年になった後、最後のところで「俺は十万の左どもに立ち向かう 20 人の青年グループで最も勇敢な最も凶暴で最も右よりのセヴンティーンだった。天皇を見る最も至福のセヴンティーンだった」それでいちばん最後に「唯一ただ至福のセヴンティーンだった」とまた「セヴンティーン」という言葉を繰り返して行くという最初のほうでみじめなセヴンティーンだったというのと対になって凄く表現としてうまいし、力強いなと思いました。そんなところですよ。

つぎ、つるさんどうですか？

つる：そうですね。非常に観念的なんだけど、左翼から右へいくというのはうまく書けているというか、まったくどちらにも傾いていない人とかが読んでもそう傾くのではないかと。だから私が読んでも納得できるというか無理のないところだと思うし、それにさっきの自分自身の存在証明じゃないけど、実際の自分よりも高められるような気がするという幻想を与えられるというのがどんな場面でもあると思うのですよ。右でも左でも宗教的なものでも。そういうの非常にうまく書いているなというふうに思いました。それと危険な年代と 17 歳が言われたのはこの小説からだ、その後 19 歳の少年に



よる犯罪が多発した時に 19 歳が危険な年齢と言われましたけど、17 歳が危険な年齢と言われるのはこれが影響しているのだという気がしました。

いとう：あと言い忘れたのですが、テーマ的に凄く過激ですよ。

つる：たいへんな物議をかましたのですよね。

いとう：それを書いた大江さんの勇気は凄いなと、この時は時代の最前線で戦っていたというかそういう作家だったのだと思いました。

つる：そうですね。この時にはこのことを書かねばならないという強い気持ちがあつてかなりの覚悟で書かれたのだと思います。

いとう：これはつまり左からも右からも叩かれるという内容です。

「政治少年死す」

タカコ：ちなみに「政治少年死す」はみなさん読まれました？

いとう：読みました、みな読んでいないんじゃないですか。

yoshimi：ネットで読めますね。

タムラ：そんなに簡単に読めるものなのですか？

いとう：便利な時代になりました(笑)。これって「政治少年死す」と雑誌では連載だったのですか？

HAL：そうです。文学界の 1 月号に「セヴンティーン」、2 月号に「政治少年死す」でした。

いとう：じゃあ最初から 2 編、前半、後半という構成で作られたものですね。

つる：性的なものや政治的なものが生きるうえで等しく大事なものという気がして、その辺がやはり今とは違うのでしょうか？

タカコ：どっちも薄まっているのじゃないですかね。

いとう：薄まっているということは、それは今の子供はということですか？

タカコ：はい、私たちもそうかも知れないけど。

いとう：時代的に。

タカコ：時代的にそうなのかも知れない。

つる：そう思いませんか。例えば性的なものはキイがはずれたような気がする。たくさん消費されているんだけど非常に上っ面のような感じがします。

いとう：こういう激しいエネルギーを伴うものになっていないということですか？

つる：はい、そういう感じがしました。

(中略)

つる：赤尾敏がいたのは相当前ですか？

HAL：相当ではないでしょう。20年くらいでしょう。

つる：それは相当ですよ(笑)。

いとう：でも、僕も演説を聞いたことがありますよ。新宿とかにもいたでしょう？

つる：そう、それから参院選なんかにも出てましたし。だから40、50くらいの方は覚えているんじゃないですか。あのキャラクターは。

HAL：最後は何か良いおじいさんになって演説していましたよ。

つる：そうですね。

いとう：そうですね。

HAL：はい。怖さはぜんぜん無かったですよ、最後の頃は。

山口二矢

タカコ：あとこの本の対談にも「セヴンティーン」のことが書いてあって、三島由紀夫とこの本の主人公の山口二矢を較べて「山口二矢は完全に天皇と自己を完全に統一化する行動をやっていて成功した。完全に軍国少年として死ぬ含めて完結している」。

HAL：実際どうなのですか。

タカコ：三島は失敗してるって言ってるんです。でも、山口二矢だけが完璧だと。

HAL：ああそうですね。

タカコ：大江さんが言ってるんです。「しかし三島さんよりずっと前に山口二矢だけは完全に超国家主義的な形で天皇と自己統一化する試みをやってみせ成功した。三島さんはその後で同じことをやってみただけどうまく行かなかった」と。

HAL：ううん、ちょっと100%は信じがたいんですけど。

タカコ：そう、書いてます。

HAL：山口二矢という人物はどうだったのですかね。つるさんは聞いたり読んでますか。

つる：どういうことですか？

HAL：私の認識は適当に踊らされたおぼかな少年という認識なんですけど。

つる：なんだろう。ただ沢木耕太郎さんの調査と解釈が現実が一番近いかと思いますが。あまりそういう影響は受けていなかったのではということです。

タカコ：沢木耕太郎は山口二矢のことを書いているのですか。

つる：そうそう、読んでいないですか？

HAL：『テロルの決算』でしたよね。

いとう：あれは良く覚えてないですけど、社会党の委員長の浅沼さんの事も書いてあって、浅沼さんのイメージがちょっとネガティブな感じに描かれてましたよね。はっきりとした思想があって上りつめたのではなくて。

つる：たまたま巡り合せたという感じで、もともとそんなに思想的に優れた人ではなくて、わりとたたき上げみたいな。人間性で好かれていたとか、慕われていた。そういうところあったのですけど。私はネガティブとは思わなくて、そういう人間だったなという感じですよ。沢木さんはあの年齢だから書けたと思うんですよ、どっちにもよらずに。浅沼さんの姿もよく書けていたと思うし、山口二矢も同様にどういう人間だったというのが再現されていたと思います。だから、あの作品は沢木さんにとって非常に良い時期に書かれたもの

読書会記録：『性的人間』

だと、両方に手を差し伸べることができたのだと。若かったらもうちょっと山口さんよりだったし、今だったら浅沼さんに軸足を置いたのに。そういう意味でけっこう良かったのじゃないかと。

いとう：山口二矢のほうもそうになっていく必然とかが見える形で書かれていたと思うんです。

つる：で、ある程度自立していたという。それがかえって踊らされていたら良かったのにと思いましたね、私は。

タカコ：大江さんが実際の山口二矢に肉迫しているかどうかは分からないということですね。だけど、この本の中で大江さんが語っているのは「山口二矢という少年は間違っただけで、一人の子供の態度としては完成していて非のうちどころないとも感じた。この人間に自分はかなわない、行動者としてはダメな青年の立場からこの特別な少年のことを書こうと思ったのです」とあります。超国家主義者として終わりから勘定してつじつまを合わせるように死んじゃって敗北的な戦いというのかな、そんなのだけど山口二矢は死んだことによって自分が完璧に奉られるような右翼からも絶賛されていますよね、やるべきことをやった少年として。

いとう：そういうあれなんですかね、今。奉られている感じなのですかね。

タカコ：今は現実に奉られているか分からないけど、「セヴンティーン」の第二部にしてもそういう風に終わるしか完結する道はない。誰でも良かったと書いてありますよね、最後に。「政治少年死す」を読んだら別に浅沼さんじゃなくても。天皇陛下と自己統一することが目標だったということですね、この。

印南：ところでこの小説のディテールって現実の山口二矢から何か引用されているものはあるのですか。たとえば家族構成だとか、何か左翼的な偏



りがあったとか。

つる：山口二矢はお父さんが自衛官で、お兄さんは理事さんだった。

タカコ：ぜんぜん違いますよね、私立高校の先生だし。

yoshimi：これを見ると今の赤尾敏さんのところに入ったのですよね。

つる：その右翼に入ったのですよ。本来なら入学資格がなかったのにあの大学に入るわけ。

いとう：ウィキペディアによると、「東京都生まれ。東北帝国大学出身で陸上自衛官の厳格な父（1等陸佐。事件3日後の10月15日依願退職）と優秀な兄のもとに育つ。大衆作家の村上浪六は母方の祖父、文化史家の村上信彦は伯父に当たる。玉川学園高等部に進んだが、1959年、16歳で赤尾敏率いる大日本愛国党に入党し、玉川学園高等部を退学。事件当時は大東文化大学の聴講生だった」

つる：そうそう、あの人のついで。

タカコ：そうするとぜんぜん違いますよね、こちらはリベラルを目指すような家ですものね。

いとう：でも、知的な家庭、そういう家だとは言えるかも。

HAL：お姉さんが自衛隊の看護師だということとか。

タカコ：最初右翼とか左翼とかというのは置いておいて、すごい父親の存在、両親、家族との関係がすごく面白いと読めたのですよね。

つる：でも、事件を起こしたときに赤尾敏は自分がやらせたというすごい株が上がるのにまったくそんなことをやるとは思わなかったって(笑)。そんな子とは思わなかったって。

タカコ：まさに自己完結しているのですね。

HAL：私は赤尾敏の影響を受けてそういう思想になって跳ね上がってやっちゃったみたいに認識していたのだと思います。いま、思うと。

むしろ限界というか、彼のマスというか思いより

実際の右翼が小さかったのでああいう行動になったのではと。

タカコ：そう思うと良く書けていますよね。

HAL：そういう意味では「純粹天皇」という考え方というのは大江さんなりに彼の思考、動機付けを小説化した内容になっているわけですか。

「あれ」

タカコ：これに「あれ」が出ていた、「あれ」。「あれ」ってここにあったのだから。

yoshimi：「あれ」って？

タカコ：『取り替え子』の「あれ」。それとおなじでテロのことを「あれ」と呼んでいるのです、刺殺したことを。「俺はあれが俺の単独犯行だと主張した」というこの「あれ」は刺殺事件について。ここにも「あれ」が有ったって私はすごく何か。でも、「あれ」ってうまい表現だなんて『取り替え子』でも思ったんです。ここにあって嬉しくなってる。この小説を書いた大江さんにノーベル賞を貰ったときに勲章をあげようとしたのは本当にアイロニーだと思ったのですよね。

いとう：文化勲章ですか。

タカコ：そう、文化勲章。天皇陛下からの文化勲章を(笑)。

HAL：あれはアイロニーでも何でもなくて役人的にノーベル賞イコールという自動的にでしょう。

タカコ：それを受け取らなかったことを非難されているけど、ありえないでしょうって。この作家にあげることは普通にはって思えるでしょう。

HAL：辞退されたのでしょうか？

タカコ：そう、でも辞退されたことがまた非難されているわけですよ、右翼からは。だけど読んだらあげることが無理でしょうと思いますよね、普通。

印南：読んでなかったりして。

いとう：大江さんを批判して声を出している人たちはほとんど読んでいないです。沖縄問題でも読まないで批判していますよ。

yoshimi：読んでいないで訴えていますね。

いとう：タムラさんは二十代ですか？

タムラ：そうです。

いとう：どうですか、いまの若い人が読んでももしかしたらなじめるような感じがあると思うのですが。

タムラ：あの、今の議論ははっきり言って私はまったくタムラというか人の名前もぜんぜん分から



なかったんですけど、「セヴンティーン」という小説を読むと左か右ということと言うのは、私は地元が青森なんですけど、そこにいてまったく分からない状態で上京して初めて大学の後ろが

靖国神社で、上から見下ろすっていう、こういうところにいるんだと。私は高校生ときに読んだのですが、勢いというか政治的なものははっきり言って私や私たちの世代の人は過剰に反応する人はそうだけど、それ以外の人はだいたいみんな何やっているのでしょうと、何をやるのだという感じの雰囲気、政治を語ること自体が恥ずかしい事。「セヴンティーン」を読んだときに、こんなに政治的なことに結びついたもので、政治的・性的なもの、それと結びついた自分の存在をこれだけミックスした作品というのは、私のときはこの文庫のなかでは、これがいちばん興奮した作品でした。すごい勢いがあります。ただ、そのときの書かれた当時の国内の状況というのがどうなのかはまったく勉強しなかったの、どれだけすごいことなのかは想像できませんでした。「政治少年死す」が発表されてそれが発禁になるのもそうですが。



「政治少年死す」の出版

いとう：それは雑誌に出たときに抗議があったのですね、右翼のほうから。それで出版するとまた抗議が来るから出版できないということになったのですよね。

HAL：ですから、発禁という表現は適切ではないです。

いとう：だから、自主規制ですかね。

つる：大江さんのお宅にも行ったんでしょう、街宣車が。

yoshimi：「作中から予測される関係団体に迷惑をかけたことについて、文学界 3 月号に謝罪広告が掲載された」とありますね。



タカコ：そういった現実の政治状況は置いておいても、読み物として本当に衝撃的ですよ、これは。さっきも同じ事を言ったけど、衝撃を受けた。17歳の少年をさっきにおさんはリアルな感じがしたと言われたけど、それは持ちにくいので、こんなことがみたいな。

yoshimi：男の人は分かるのだけど、女性から見るとちょっと。面白いのだけど。

スヌーピー：こうなんだって(笑)。

yoshimi：こうなんだ、本当？ 男女の性の違い。

つる：草食じゃないよねって。そうなんだ男の人って。

マハル：すごい力を感じましたね、私は。大江さんががんばったみたいな感じがありましたね。



タカコ：こういうところから

ずっと読み続けて来られるって幸せですよ。この幅というか、その時代、時代でいい意味でちゃんと裏切り続けて、進化とっていいのか何て言ったらよいか分からないけど、成長というか常にこうで、すごいなって。

つる：それで先ほどのあれだと何か自分は行動とは繋がっていないというけど、行動するほうだって。これだけの作品を書きながら、他に気を使ってとかいろいろな体力とか気力だとか使わないで欲しいと思っている人だって絶対いると思うのに、いろいろなことをやりつつでしょう。それこそ政治的な発言もして。それはだから本当にたいへんなエネルギーだと。

印南：じゅうぶん行動していますよね。

一同：そうそう。

印南：いま仮に全集とかが編まれるとして、この「政治少年死す」を収録するって可能ですかね。

yoshimi：でも、いまでも。

タカコ：どうなんですかね。

印南：著作権は大江さんにあるし、出版社はどこでも大江さんの意向があれば。

yoshimi：でもいま沖縄裁判の集会をやっている、すごいのですよやっぱり。これを出すってちょっと。

印南：逆に意図を勘ぐられますね、それは。

いとう：いま在特会って、在日外国人の特権を許さない考えの団体があって、ネットで集まって、ネットでこの日集会をやるぞって集まって行動しているグループがあるのですが、G2(?)か何か取材記事があって桜井なんとかという人が取材しているのを読んだことがあって、その主催

読書会記録：『性的人間』

者の人はもともとはおとなしい人で静かな子だったらしいのですが、あれがある右翼の団体の指導者で激しい演説をする人に出会ってそれで感化を受けてすごく一変して、攻撃的な演説をするようになって先導者としてアジテーターとして具体的なデモとか抗議行動をやるようになってネット上でもいっぱい活動していて Youtube なんかにもデモの映像をいっぱい出しているのですね。そういう人たちなんかはもし「政治少年死す」なんかを出すと、食いつきそうな感じがします。民主党の小沢さんが中国の首脳が来日したときに、天皇の都合を付けさせて会わせたという事で、右側の攻撃がすごかったですよね。しかもネットを見ていると若い人らしいのです。その声で天皇陛下をなんだと思っているのだとそんな感じの声がけっこうあって。そういうのを見ると「政治少年死す」なんかを出されると攻撃が集中しそうですと感じます。

つる：そういう訳の分からないことを言っている人たちは思考じゃないです。だから余計始末が悪いです。チベットの支援の集会なんかに行った時なんですけど、右翼の人たちがいてけっこう若いネットをしているような人で。なんでこいつらなんだというとか中国なんです、中国が嫌い。

印南：敵の敵。

つる：もう非常にがっかりして、その場の雰囲気も悪いし。もちろん支援の輪は広げたいけど、この人たちとやるのだったら私はやりたくないと思ってしまったのですけど。そういうのって本当に危ういという感じがします。

印南：その思考じゃないという感じはこの「セヴンティーン」の中にもそういった面がある感じがします。それこそいまのネット右翼だったり、左翼だったりのそういう状況を的確に表している。

いとう：僕もそう思ったのです。ネット右翼の人たちがこれを読んだらすごくよく分かる感じがするんじゃないかって。

タカコ：最後のほうに「私心を捨てる、俺はすべてを放棄する」。それって思考停止ですよ。

HAL：大江健三郎という名前を伏せてそういう右翼の人たち、若者たちにこの小説を読ませたらどういう感触を持つのですかね。意外に「すばらしい小説だ、まさに俺たちが考えている事だ」みたいになりませんか？(笑)

つる：何か面白そう。

タカコ：三島由紀夫が手紙を書いているのですよね。「セヴンティーン」を読んで、「三島由



紀夫氏が強い関心を持って、大江健三郎は実は国家主義的なことに情念的に引き付けられている人間なのではないかといろいろな人に言われたそうですし、直接三島氏からの手紙を両者を担当する編集者を通じいただいた。そして三島氏の読み取りは正しかったと思いますね。一方では安保闘争の運動に心から入って行きながら、その反対側の国家主義的なファッション的な天皇崇拝の右翼青年にも共感を感じているようなそういう人間として小説を書いていたことがいま自分にもはっきりわかります」って。本当にそれを見事にお書きになっていますよね。だから「セヴンティーン」はいろいろなものが後に萌芽する大事な小説だったのだと今回拝読して思ったのです。それで「あれ」も含め、すごく大事な小説だったのだと思いました。

yoshimi：づれてないんですよ。

タカコ：すごいよね。

yoshimi：づれていない。すばらしい。

HAL：そういう意味ではこの「セヴンティーン」だけを単独に残しておくというのは間違っています。「政治少年死す」と対であってはじめて大江さんがこのときにこの小説を書く意図が達成されるわけですね。

タカコ：家族のこととか違うことで、そうしたいけ

読書会記録：『性的人間』

どあまりになんだったの、そうされたのではないですか。

HAL: そのときはご家族の安全を第一にされたのですね。

タカコ: いまやっても同じようなことが、もっとね。

いとう: 出版社がいやがるのでは。小さいところだったら出そうということがあるかも知れない。タカコさん、だんなさん出版社ですよ、いかがですか？(笑)

タカコ: うちが失うものは何も無いので、何でも。

いとう: 大手はすごく怖がる傾向が強いんじゃないですか。

タカコ: 怖いですよ、言葉が通じないのですから。思考停止なんですもの。

タムラ: 出版社が出しても売れるほうが売らないですよ。ネットで見れるなら。

いとう: それもありえますね。

タカコ: リスクを冒して出しても今の本を読む状況からいったら何か合わない気がする。

いとう: 得るものは少ないということですか。

タカコ: だって読む人は読んでいますもの、読むべき人は。

つる: リスクを冒して出して、それこそ世界ヒットになるくらい売れば勝ちですけどね。

タカコ: そういう状況にはないでしょう。ましてこういう純文学の読者は。大江さんは数少ないとおっしゃるけど、数少ないとは思わないけど。

いとう: でも幻冬舎なんかみたいところは、そういうリスクを逆手にとって話題づくりにして。

yoshimi: 幻冬舎から出して欲しくない。

つる: あのタイトルと書棚に並ぶのはやめて欲しい。

いとう: イギリスの英語教師殺害の市橋なんとかという人の手記が出る。

yoshimi: もう出ています。

タムラ: 幻冬舎です。

一同: そうなんだ。

タムラ: 私はいま書店のバイトをしまして、ちょっとウチで問屋が入ってきた状態でどうするか相談したんです。ウチは大手の書店ではあるんですけど、店舗自体は小さくて、これはどうしようと思ったんですけど、問い合わせが有ってそれがすごくウツリした感じで「市橋さまの・・・」って。

一同: ええ！

タムラ: 女性の方です。ウチはそれで置きましょうということになったんです。

いとう: 僕は読みたいと思いましたがね。

タムラ: そうですね。それは週刊誌に載るような話なんで、何とも言えませんが問い合わせはそういう感じの方が多かったです。

つる: 読まれました？

タムラ: 読んでないです。

いとう: 置くかどうか相談するのはどういうことですか。売れるかじゃなくて？

タムラ: モラル的なところで。本部からの圧力は特にはないですし、ただ店長のモラルとしてはその売上げがたしかリンゼイさんに行くというけど、それで利益を出してもウチの店長的にはちょっとなんだなというところで。

いとう: ものすごく良心的な書店だなと感じました。

タムラ: でも結局場所はないか、僕は置きたくないのだけどねと。

いとう: 他の本でもそういうことってあるのですか？

タムラ: そこまでショッキングではないけど、ちょっと最近では性的なハウツー本がまた流行りだして、それが各社から出るようになって、だいたい何年周期くらいできますから。それが若い人向けじゃないというので、ウチの店はどちらかというと商店街に近いほうなので、若い人ではなくて

読書会記録：『性的人間』

そこで生活されている方がメインで。そういう本がたくさん出てきているので、それをよく思わないお客様もいて、せめて袋をかけて下さいとか言われたりして。うるさいんですよね、ディベロッパーとか、路面店とかだとエロ本は置いちゃいけないとかいうのはあるんです。

いとう：大家さんとかが？

タムラ：そうです、それもああるんです。いまは大

体の本屋さんには置いてないんじゃないですかね、あまりあけっぴろげなやつは。最近都の条例で規制があったというのも、あれはちょっとやりすぎなんですけど、それに多少ふれつつ前にハガキとかが来て今度ここから出されるやつは置かないでくださいとか。

(後略)



続・yoshimi の オーケンな日々

都内某所に棲息しフリースタイリストを生業としている yoshimi です。随所にめぐらしたアンテナから「大江情報」をキャッチして、今日もどこかに出没中。通信 2号から続く「yoshimi のオーケンな日々」2011。今回もちょっと覗いてみませんか？

1月18日 ファンクラブ通信2号完成

ファンクラブの有志で作っている「ファンクラブ通信2号」の原稿がでそろった。アートディレクターとしてはこれを何とか形にしないとイケない。創刊号よりも格段に充実した内容になったのできっと大江さんも楽しんでくださるに違いない。まずはプリントからだ。新しいカラーインクと上質なコピー用紙を購入した。「さあ、がんばって印刷をはじめよう！」とはじめてはみたところ、なにせ家のオンボロプリンターでの手作業。両面プリントにするため一枚一枚手送りで差し込む。高性能のプリンターがあるわけもなし。まあこのへんがしがないフリーランスの悲しさだ。プリンターにつきっきりで自分の分と大江さんの分、2部印刷するのに3時間半。ふあっ〜 つかれました〜。それでもがんばったかいがありステキな「ファンクラブ通信2号」ができあがりましたよ。後は製本して大江さんのお誕生日にあわせてお送りするだけだ。通信 2号のために原稿を寄せてくれたみなさんどうもありがとう！



1月29日 ファンクラブ読書会『性的人間』

今日は久しぶりの読書会、帰国中の HAL さんのスケジュールに合わせて開催する。読書会常連メンバーにはスペイン・アメリカ・ドイツへと留学や仕事でいかれ活躍している人たちもいる。さすがにわが大江ファンクラブ、ワールドワイドに羽ばたいているのである。今回の課題図書は『性的人間』だ。大江作品の文庫本を被写体にして「愛する大江文学」という写真集をつくって大江さんに送ったことがある。その時にこの本だけがどうも納得できない写真になってしまった。悔しいので文庫本を持ってロケ撮影にリベンジ。今回は森の中で撮影をしてみた。やはり木々の呼吸を感じながらの撮影は大江さんの本にはピッタリだ。なんとか合格点をつけられる写真になったので満足する。私は『性的人間に』ヌーヴェルヴァーグの匂いをブンブン感じた。ちょっと退廃的でこじやれた映像が眼にうかぶ。映画好きだった



続・yoshimi のオーケンな日々

武満徹さんが一番好きな小説だったというが、武満さんはどんな感想を持っておられたのだろう。大江さんに贈っている「ファンクラブ通信3号」に使う予定で読書会を進めた。途中でメンバーの写真も撮る。久しぶりに顔を合わせ、好きな大江作品について存分に語り合える幸せでみな表情は生き生きと輝いていた。読書会後はお決まりの新年会。今年も大江さんとファンクラブにとっていい年になりますように・・・



1月31日 大江さんのお誕生日



今日のお誕生日にあわせ『ファンクラブ通信 2号』を大江さんに届ける。昨年10月にタケミツホールでミニ写真集に書いていただいた和歌への返歌の意味も込めて、桜の枝をいれた花束をそえた。1月の桜はまだ小さな花びらの山桜。ソメイヨシノのような賑わいはないけれど楚々として美しい。どうしても桜の枝を入れたくて早くから馴染みの花屋に頼んでおいたのだ。花束も通信2号も気に入ってくださると嬉しいのだけれど。

「大江さん 76 歳のお誕生日おめでとうございます」

3月17日 ルモンド誌に寄稿「歴史は繰り返す」

震災後、なにもできず無力感に打ちのめされ落ち込んでいた時に、はやばやと「ルモンド誌」に寄稿された大江さんの言葉「歴史は繰り返す」をネットで読んだ。震災の前日に大江さんは第5福竜丸で被爆された大石さんのことを考えておられたという。つまり核実験・原爆のことに思いをはせておられたという事だ。そして翌日・地震と津波によって原発事故は現実化してしまった。なんと偶然のできごとなのだろう。地震は太古の時代から人類が向き合ってきた自然災害だけれど原発事故は広島・長崎の記憶からなにも学んでこなかった人災だと指摘された。そしてこの悲しい災難から生き抜いた人たちが過ちを繰り返さない決意する事が大切だと強く訴えられた。現在執筆されている最後の小説の冒頭にダンテの「かくてこの處をいでぬ、再び諸々の星をみんとて」を引用なさるといふ。

28日の「ニューヨーカー」にも同様の記事がだされた。いち早く大江さんの言葉を日本の新聞より海外での報道から知ることになるとは。わが国のマスコミってほんとうに情けない。震災後の報道発表をみていると強くそう感じる。大江さんの力強い文章に触れることで私はまた勇気が湧いてきた。

「苦しい所から草が延びるように生き延び(outgrow)て、真直に立つ(upstanding)人間にならなければ」

4月7日 第5回大江健三郎賞発表

『群像』5月号で今年も待ちかねた「大江健三郎賞」が発表された。第5回の受賞作は星野智幸さんの『俺俺』。さっそく購入して読み始める。何だか不思議な世界観を持った小説だ。自分がどんどん増殖して周りが俺だらけになっていく。これってSF映画みたいな感じで映像にしても面白そう。同一視された世界はまるで震災直後の世相に通じる不気味さと共通する。そう思ったのは私だけだろうか？大江賞の1回目長嶋有氏との対談で、大江さんは少なくともこの賞は5年間続けたいとおっしゃった。早い

続・yoshimi のオーケンな日々

もので今年でもうそれをクリア。ひとりで選考しているわけだから大江賞だけでもすごい数の小説を読まれるのだろう。大江さんは年間にいったいどのくらいの小説を読むのだろうか？受賞作品だけでなく次点とか 3 位とか迷われた小説なども知りたいものだ。大江賞にもそろそろ女性作家がくるかな？と思っていたが今回も男性作家だった。昨年秋のドゥ・マゴ賞の朝吹真理子さんは大江さん好みの文章を書かれているので少し期待していたが、芥川賞をとられた時点で私の中では大江賞から消えてしまった。残念。しかし『俺俺』はすごく面白かったので星野さんにもがぜん興味がわいてきた。来月の授賞式ではどんな話をされるのだろうか？とても楽しみだ。

4月9日 憲法のつどい 2011 鎌倉

鎌倉九条の会主催の憲法のつどい 2011「井上ひさしの言葉をこころにきざんで」が鎌倉芸術館大ホールで開かれた。不覚にもこの講演のことを開催直前になって知る事になり慌てて申し込みをしたのだがすでに完売。井上さんが旅立たれて 1 年目、大江さんがどんなお話をするのか聞き逃すのは諦めきれず鎌倉九条の会に、キャンセル待ちでも立ち見でもいいから無理ですか？とお願いメールをだしてみた。すると事務局長のHさんから直接電話をいただいた。「確定ではないが別会場でスクリーン放映を考えています」と。わざわざ電話を頂戴するなど私の必死のメールが心にかかったのだろうか？でも結局は別会場での映像は実現せず私の鎌倉行きは断念することになった。ファンクラブの印南さんが講演会に行かれてメーリングリストでレポートをしてくれた。それによると大好きな『父と暮らせば』の竹蔵役を大江さんが演じられたという。なんと素晴らしい演出だろう。あ〜〜っ、行きたかったなあ・・・なにを隠そう学生の頃は局アナを目指していたあたくし。朗読劇には思い入れがたくさんある。私も大江さんに向かって「おとつたん、おりがとありました」言ってみたいなあ・・・

4月10日 高円寺「原発やめろデモ」

震災後のメディア報道に不信感を持ち、もっぱら情報はネットで収集していた。そんな時「素人の乱」が中心になって高円寺で原発反対のデモがあることを知った。デモというと政治的に偏った人や大きな組織に属していないとなかなか参加できないと思っていた。でも今回のデモは普通の人たちで行なう市民のデモという印象。ひとりで参加するのは少し心細いけどとにかく行ってみよう。午後 1 時高円寺の集合場所の公園に到着。その時点ですでに人がいっぱいだ。見回してみると小さな子供を連れた



家族、若いカップル、外国人、九条の会でよくみる 70 歳代の人たち、女子高生らしき集団、乳母車で参加のお母さんといろんなタイプの参加者がどんどん集まってきた。なんだか日本のデモのイメージを覆される多様な集会になっていた。会場に来るまで不安だった気持ちが吹っ飛んだ。そして出発の午後 2 時。ものすごい人数が高円寺の街を「原発やめろ〜！！」「原発はんた〜〜い！！」と行進した。その数 15000 人。特別な団体に属しているわけではないので私も抗議デモには数回しか参加したことがない。今日も初めてデモに参加したという人が多かったと思う。人として素直に「原発は怖い、原発を

続・yoshimi のオーケンな日々

止めて、原発はもういらぬ」と多くの方が意思表示したのだ。思いきって参加して良かった。小さくてもアクションを起こすこと、大切なことだね。デモ終了後は原発反対署名と少しだけ募金をして心地良く帰路についた。

4月12日 青山ブックセンターセミナー「編集者の仕事 雑誌をめぐる冒険」

雑誌『Switch』の新井敏記さんと『考える人』『芸術新潮』の元編集長だった松家仁之さんのトークショーが青山ブックセンター本店で行なわれた。松家さんは『考える人』の編集長時代に毎週木曜日に配信されるメールマガジンを読んですっかりファンになった人だ。毎回本への愛情がたっぷり感じられる内容と穏やかで知的な文章に魅了されていた。機会があったら生の声を聴きたいと思っていたあこがれの編集者だ。さらに伊丹十三さんともご縁が深く以前に伊丹プロに入らないかと誘われたことまであったそうだ。松山の伊丹記念館を建築する時もいろいろとご尽力されたと何かで読んだ事がある。ブックセンターの一角に設けられた松家さんの推奨する本のコーナーに、大好きだという伊丹さんの本が並んでいる。その隣には『万延元年のフットボール』もあった。「大江さんは伊丹さんの高校時代の親友であり、義弟です。伊丹さんが話し言葉を極めた頃、大江さんは書き言葉としての小説をこなすごい領域にまで突きつめています」のカードが添えてあった。

もうひとり新井さんは3回も大江さんの特集を組んだ雑誌『Switch』の責任者だ。そして私が大切にしている大江さんのミニ写真集を作ってくれた人。気づかなかったが大学の学部も学科も同じ先輩でもあった。対談終了後、新井さんの本を購入した人にはサイン会があった。本を買って列に並んだが私は例の『Switch』ミニ写真集を差し出した。それを見た新井さん「え〜っ！なんでこれ持ってるの！？200冊しか創らなかつたんだよ」大江さんから頂いたサインとメッセージを読まれとても喜んでくれた。そして自分の新刊ではなく写真集にサインを書いてくださった。いろんなところで大江さんにつながるもんだなあ。まあ、狙って行っているのですけれど。これで繰上和美さんのサインがあれば最強の写真集になるのだな。(ふ、ふ、ふ)



4月14日 岡田利規の「日本語講座」

第二回大江健三郎賞受賞の岡田利規さんの公開講座がSNACで行なわれた。会場は清澄白川の下町商店街の店舗兼倉庫のような場所。初めて行くので少し迷った。殺風景な土間のスペース、そこにパイプイスが50席くらい並べてあった。部屋の奥でゴゴゴ機械を準備しているマスク姿でぼさぼさ髪のお兄さんに「トイレはどちらですか？」と聞くと「あっ、この先ですよ」と答えてくれた。その人がなんと岡田さん本人だった。主宰するチェルフィッチュの公演は海外でもとても高い評価を得ている。その戯曲を書き、演出もこなす作家はどんな人と思われるだろうが、お会いすると本人は飾り気のない自然体の人という印象だ。今回の講座では岡田さんは日本語の美しさにこだわる。「日本語は、美しい。例えば『写真はイメージです』この一文にどれだけ豊かな事情が含まれていることか！ こうした言葉の中に

続・yoshimi のオーケンな日々

込められた日本語の心を見つめて、おもしろがらしましょう。へんな日本語を分析する。これを正しい日本語にするとしたらどうなるか、どういった力学でこのような文章の据わりになっているのかを、分析しながら面白い、みたいなことを授業形式でやったらおもしろいかな、と。授業というか、ゼミですね」こうして岡田ゼミは始まった。

例題は岡田さんが自ら車で撮影をしてきたという次の文章がスライドで見せられる。「駅構内で許可無く寄付を求めたり物販の販売配布やその他演説・勧誘等はできません」ここから参加者が自由に意見を出し合って正しい日本語にしていく。フリートークでいろんな発言が飛び出す。それを岡田さんが巧みな話術で組み入れ言葉をつむぐ。こうして岡田ワールドの講座は進んでいった。1 時間半があつという間に過ぎる。ちょっと学生時代に帰ったようなワクワクした楽しい授業だった。岡田さんは近い将来日本を代表する演出家となるだろう。

4月21日 大江・岩波沖縄戦裁判「勝利」

大江さんが長い間闘ってこられた裁判にやっと勝利の判決が下りた。「大江・岩波沖縄戦裁判を支援する首都圏の会」に入っただけで5年になる。勉強会に出席するたびにこの裁判が名誉毀損という名のもとに始まった一部の人たちによって沖縄戦の事実を歪曲しようとしたきわめて政治的なものであったことがわかった。それでもこの裁判で大江さんをはじめ沖縄の人たちは沖縄戦での思い出したくない辛い体験を勇気を奮って語ってくれた。これは大江・岩波だけではなく沖縄の人たちをも含めた大いなる勝利となったのだ。

私には2007年4月17日に朝日新聞に書かれた大江さんの「定義集」の冒頭が強く心に残っている。「私は2年前から裁判の被告です。生まれて初めてのことで1年目は書く仕事に関わる裁判の弁護士費用を、税の申告に必要な経費として計上することを考えつきませんでした。最高裁まで行くはずだから、と私が暗然とすると――すべて終わって、本に書くまで生きていられるように、ガンバロウ！と家内は勇み立ちました。これも初めてのことです。」今回の長い裁判は大江さんだけでなくゆかりさんやご家族にとってもさぞかしご心痛の種だったことだろう。やっと終わってほんとうに良かった！と心から思った。今夜はひとり祝杯をあげたい気分。

5月5日 紀伊國屋セミナー「日中韓大江文学読み比べ」

紀伊國屋サザンシアターで行なわれた「大江健三郎の文学を考える」に行った。このシンポジウムは数多く聴いた大江さんの講演会の中でベストワンとっていいくらい感動した内容だった。会場には講演者・スタッフも含め500人弱の人がいたと思うが、きっと誰もが同様の感覚に浸ったのではないかと思われる。大江さんを敬愛する12人の発言者、大江さんを敬愛するシンポジウム運営側(紀伊國屋・サザンシアター・講談社)そして大江さんを敬愛する468席の観客がほんとうに満たされた幸せな6時間を共有した。私が特に素晴らしいと感じたのは魅力的な3名の女性の発言者の話だった。朴裕河さんは韓国版『水死』の訳者、尾崎真理子さんは大江さんの『作家自身を語る』のインタビュアー、そして一番若い朝吹真理子さんは愛読書を『新しい人よ眼ざめよ』だと公言している期待の新人作家。講演は事前に書かれた原稿を講演者が読み進めるという形式で始まった。シンポジウム前に家に届けられた原稿を読まれたゆかりさんは「これだけ選び抜かれた女性達の意見はもうないだろう。まるで生前葬といえるようですね」と感想を述べられたという。大江さんへのラブレターとも言える内容を直接大江さんの前

続・yoshimi のオーケンな日々

で朗読できるなんて、なんと羨ましい。さらにそこは書くことが仕事の3人の女性たち。美しく品のある三様のたたずまいそのままに、朴さんは力強く、尾崎さんは知的に表現した。最後を締めた朝吹さんは「未来を愛する意思」と題して大江文学を少し低めなトーンで語った。「大江作品を読むたび、ここから私の考えることは始まると思います。回避不可能な危機に瀕したとき、私は大江さんを読みます。作品に寄り添うように読み、自分の想像力で押し広げてゆく過程が、意志をもって現実と向き合う準備になります」東日本大震災の後も夜ごと、大江さんの小説や往復書簡集を読んできたという。「どうすればよいかはわからなくても、意志をもって考えることを続けようと思いながら・・・」抑揚を抑えた、ささやくような朗読はとても美しくステキなパフォーマンスだった。

休憩時間にロビーで安藤礼二さんにお会いできた。「大江ファンクラブのものです」と札幌から来てくれたタカコさんと一緒にご挨拶をしたら大江賞の時にさしあげた青バラの花束のお礼を言ってくださった。また講談社のYさんもいたのでこちらにもご挨拶。「大江賞対談の招待状まもなく届くと思いますよ」と言われた。ただ今回は対談後のパーティーはないのだとか。まあ今年はいろいろありましたからね、野間さんのご不幸もあつたし。昨年のようにはいかないのだろう・・・

12人の発言者の発表を受けて大江さんのお礼の言葉があつた。大江さんはとても高揚しながら話はじめ少し涙ぐんでいるようにもみえた。話の中で渡辺一夫先生を知るきっかけとなった本の話がされた。私は渡辺先生を知ったのは「フランスルネサンス断章」だと記憶していたのだが実は『狂気について』だったらしい。これは新発見！すぐに図書館で探して読まなくては。また執筆中の小説はサイドさんへのお礼の意味が込められていること、光さんとのほんとうの意味での和解がテーマであること。『水死』では父親を書いたが今度は「祖父」を書くつもりと新作情報も話してくれた。3.11以後ずっと大江さんの生の声を聴きたいと切望していた私に今日のシンポジウムは新たに生き直す勇気を与えてくれた。お母様の言葉から喚起されたご自身の詩に言及し「震災による死者は生き直すことはできない。しかし、生き残った私らは死者の代わりに生き直すことができる。この表現は希望の言葉として聞き取れる」と結ばれた。この言葉を胸に今日から私も生き直さねば・・・

講演を最前列で聴いた私と3列目で聴かれたタカコさん。終わってから「今日は来て良かったですね～！！」手を取り合って私らは感涙した。

5月6日 井上ひさし作「たいこどんどん」観劇



「たいこどんどん」は井上ひさしさんが直木賞受賞後の第一作として書いた小説『江戸の夕立ち』を劇化したもので初演は1975年。ひょんなことから江戸から東北へ流れついた日本橋の薬問屋の若旦那・清之助と、かけ出しのたいこもち・桃八がくりひろげる男二人のみちのくでの珍道中話。清之助を中村勘三郎が演じるというので勘三郎最良の私は楽しみにしていたのだが、病氣静養となり代わりに義弟の橋之助がつとめた。これが薬問屋の若旦那という設定にピタリとはまりなかなか良かった。演出は井上作品では評判の蜷川幸雄氏。厄難に見舞われながらも身を粉にして働いてやっとふたりで江戸に生還してきたが、9年の間に江戸は東京へと激変していた。それに伴い清之助の地道な苦勞の積み重ねも水の泡と消えてしまう。それでも希望を持って精進しつづけるしかないのが一市民である清之助と

桃八の人生なのだ、と諭しながら劇は終幕する。歌や、踊り、お座敷芸など笑いがあふれるエンターテインメントの底には、庶民に向けられた作者井上ひさしの暖かい眼差しがあふれていた。その眼差しは2011年にもまた同じ強さで光り続ける。この物語の終景を書いたときの感想として井上さんは初演のパンフレットで次のように書いている。「…常に世の中が先行し、その世の中に庶民が歩調を合わせていくという茶番は、もうぼつぼつやめにしたらどんなものだろう(中略)われわれは世の中の主体であるという考え方は、いいかげん捨てたほうがいい。わたしたちはその客体なのだ」と。社会は激変していても根本的なところで「なにも変わっちゃいない」体制への静かな怒りや、時代に不意打ちされつづける大衆への思いが熱くこめられた作品だった。常に市民側に寄り添って創作していた井上さんの精神は創られたものを観ることによってこうして生き続けるのだ。今年6月に『雨』9月に『キネマの天地』とたてつづけに井上作品が再演される予定だ。昨年の九条の会「井上ひさしさんお別れ会」で澤地久枝さんが言った言葉が思い出される。

— 井上さんの芝居を観よう、本を読もう、それが井上さんの志を継ぐことに —

5月14日 映画『亡命』試写会

映画『亡命』のことは昨年大江さんと高行健さんの対談で話されているのを読んで公開を心待ちしていた。この映画は作家の鄭義(ジェン・イー)や高行健(ガオ・シンジャン)、天安門事件の学生リーダーだった王丹(ワン・ダン)など中国で起こった文化大革命によって亡命を余儀なくされた知識人、作家、芸術家、詩人、政治活動家たち14人へのインタビューからなっている。中国の民主化の意味や人間の尊厳について問い掛ける社会派ドキュメンタリー映画だ。監督は日本在住の中国人ジャーナリストの翰光(ハン・グアン)氏だ。映画に登場する鄭義さんは2003年10月に行われた日本ペンクラブでのイベントで大江さんと対談をした。その日最前列で講演を聴いていた私はいたく感動したのだった。その対談の時も亡命者である鄭義さんはパスポートがないため来日するのがとても大変だったと話されていた。早くから鄭義さんを高く評価していた大江さんはノーベル文学賞受賞講演でも、2000年北京での講演のなかでも鄭義さんに言及していた。とくに北京講演では鄭義さんの名前をだすと中国側の通訳が話をやめてしまった。その時大江さんは「これを訳さなかったら、僕は話を止めて帰る」と断固抗議したという。またもうひとり高行健さんは昨年早稲田の大隈講堂でご本人の講演を聴いた。直接生の声を聴いたこともあり、大江さんとも親交深いお二人がでてくる映画。これは観ないわけにいかない。

インタビューから見えてくるのは、一つは文化大革命や天安門事件の実相。とりわけ天安門事件については、当時の実際の映像が多く使われていて、あれがどのような事件であったのかがリアルに伝わってくる。あの時点での映像がそのまま使えたことにもちょっと驚いた。政府との対話を求めて広場を埋め尽くす何万人もの若者たち、鳴り響く銃声、逃げ惑う若者たち、血まみれで倒れている人たち…。当時学生リーダーだった王丹はこう語る。「政府が銃をもって学生運動に幕を引くとは思ひもなかった。身内の問題だろ、僕らは子供で政府は父母と同じだ。どこの親が子供に銃を向ける？ 僕らの条件を飲まないにせよ、声ぐらい聞かだろ。衝突を防ごうと集まった人民に軍が発砲するわけではないと思っていた。これは畜生のやることだ」

出演者ひとりひとりの亡命することへの苦しみもひしひしと伝わってくる。アメ



続・yoshimi のオーケンな日々

リカで暮らす鄭義さんは、読み手のいない欧米で中国語で書く創作活動の意味への苦悩を語る。しかし自分が転向して母国へ戻ったとしたら、天安門事件の犠牲者たちに申し訳ないとも淡々と話す。フランスで暮らす高行健さんは体調に不安を覚えながら絵画や文筆活動をやめることはない。映像に紹介された高さんの描かれた絵画は美しくぜひ実物を観たいと感じた。出演者はみな、穏やかに、ときにユーモアも交えながら、その人生、その選択を語る。その底に抜きがたい深い悲しみと、現実亡命という選択を実行した人間ゆえのものか、魂の崇高さをも感じとれる。天安門事件から20年以上たった今も続く問題について改めて深く考えさせられた。

5月16日 司修ミニアチュール展

大江さんの小説の挿絵でも良く知る司修さんの展覧会が青山の始弘画廊で開催されていた。仕事でいつも通る骨董通りから一本入った通りなのでちょっと立ち寄ってみた。南青山の路地を入った大きな桜の木が目印のかわいらしいちいさな画廊だった。司修ミニアチュール展(『司修のえものがたり— 絵本原画の世界』開催・『本の魔法』出版記念)と入り口に書いてある。始めて観る司さんの原画は思ったより小さかった。単行本と同じくらいの大きさでとても繊細で精密で叙情的な作品ばかり。また色の使い方がなんとも美しい。大江さんの小説の表紙になった原画もあるのかな?と期待したが今回は展示されていなかった。でも大好きな向田邦子さんの『夜中の薔薇』があったので大喜びしてしまう。さらに武満徹さんをモデルに描いた鴉の絵の前でしばらく動けなくなった。ちいさな作品は展示がとても低い位置にあり身をかがめて鑑賞するようになっていた。係りの人に聞いたら「ちいさなお子さんでも見られるように」との司さんの配慮だという。絵本もたくさん書かれているからこうした心遣いもされるのだなとあったかい気持ちになった。展示準備の時は司さんが1点1点丁寧に配置を考えられていたという。武満さんの絵には20万の値段が付いていた。去りがたく見惚れていたなら「先生もその絵が一番好きとおっしゃっていましたよ」と教えてくれた。20万か・・・う～～ん、観るだけで我慢しよう。

5月19日 大江賞受賞公開対談

今日は毎年参加している大江賞公開対談の日。第一回の長島有さんから5年間ずっと参加している。このところ仕事が忙しかったので少し体調が思わしくないが大江さんを拝見できるのだからそんなこと言っていられない。今回は対談後のパーティーはないと講談社のYさんがおっしゃっていたので、花束は遠慮した。今年は東日本大震災や講談社でもご不幸があったので自粛ムードなのだろうか。でも昨年の対談後のパーティーは夢のような時間だったなあ。あれから1年か・・・時間の過ぎるのがほんとうに早く感じる。いつものように家から歩いて講談社に向かう。春日通りから坂道を下って講談社に続くこの道は私のお気に入りの散歩コースでもある。

舞台に向かって例年どおり右に大江さん、マオカラーの白シャツに薄いグレーのスーツ、星野さんは黒いTシャツにブラックジャケット、今年46歳だがもっと若く見え爽やかな印象だ。

大江さんの「3.11後の大変な時です。のんびり対話していいのとかやじられかねませんが、最初は打ち解けた話にしたい」というすべりだして対談はスタートされた。大江さんは『俺俺』を読んだ時、安部公房に似ていると感じたと。それに対して星野さんは『俺俺』を書くにあたって安部公房の『闖入者』『友達』など他人が闖入ってきて家族になりすましてしまうという話を読み返したと返答した。そういえば第3回大江賞受賞者の岡田利規さんが演出した芝居「友達」をファンクラブの仲間と観たことがある。

続・yoshimi のオーケンな日々

31 歳独身商社マンの部屋に赤の他人の家族 9 人が突然現われそこに住み込んでしまう話だ。非現実的な設定でありながら、日常生活に潜む不条理を寓話的に描いていてすごく面白かった。たしかに『俺俺』の読後感と共通する。星野さんは選評で大江さんが安部公房をだした事に「自分が書く準備をしているところまでのぞかれた思いがした」と驚かれたのだと言う。その後もスムーズにおふたりの実りある対談は続いた。昨年の中村文則さんとの対談は大江さんの独壇場だったから今回は少し反省されたのかしら？それに客席からの質問も大江さんは「星野さんに限る」と限定していたし。

最後に大江さんが話されたことが広告業界にいる私にはとても印象深かった。それは 3.11 以後に流されたテレビ CM についてだった。「根拠も示さずに「日本は強い国」「日本の力を信じてる」「日本はダイジョウブ」という。あれこそが「俺俺」タイプの言論なのではないか。これで安心した人たちが日本にみちることになったらどうなるのだろうか？こういう危機に際しては、君は俺と同じだ、俺は君と同じだというより、俺は君とは違う、君は俺とは違う、しかしやろう、という決意が重要なのではないかと。みんなそれぞれに違う不安を持っている。俺は俺であってあなたとは違う、あなたは俺とは違う。しかしひとつの大きい危機に取り込まれている我々は違った個として協力するほかはない、同じ方向性の声を自分の責任で発することができると認め合う。そこに意味があるのだ。そして文学とは本来そうしたものでないだろうか。原発の危機が懸念される今まさにこうしたあり方が人として大切になってくる。」今年の大江賞公開対談はいつにもまして心打たれた。

星野さんよくぞこの小説を書いてくれました。ありがとうございます！

5 月 21 日 公開講座「言葉が生まれるところ」

多摩美術大学八王子キャンパスで行なわれた公開講座「言葉が生まれるところ」の公開授業を受ける。安藤礼二さんが司会をしながらの佐々木中さん、朝吹真理子さんとの鼎談だ。なぜこの講座を？と思うだろうが 3 人とも大江さんを敬愛してやまない作家なのだ。ファンとしては「大江さんを好き」と公言している作家にはそれだけで親近感をもってしまう。安藤さんはいわずと知れた大江賞受賞者、昨年の群像に発表された『「懐かしい年」の変容—大江健三郎「水死」論』は『水死』を過去の作品のスクラップアンドビルド方式で構築していると評論していた。とても共感でき「大江愛」を感じる論文だった。朝吹さんは先日の紀伊國屋のセミナーですっかりファンになってしまった人だ。彼女の事を大江さんは力のある言葉を自分の作品に忍ばせることができる作家だと高く評価していた。そして佐々木さんは昨年秋に渋谷のブックファーストでの自身の選書フェアで 40 冊厳選書に大江さんの小説『ピンチランナー調書』『個人的体験』『飼育』を選んでくれた。

多摩美は八王子駅からバスで 20 分ほどかかる。都心からだとは少し不便な場所にあった。美大特有のかなり个性的で自由な雰囲気のある学生が多い。少し広めの教室に学生 8 割、一般 2 割くらいの比率だろうか？こんな授業が受けられるのだから今の大学生は羨ましい。などと思っていたら 3 人が登場。少し汗ばんだ日だったのでとてもラフな服装で現われた。朝吹さんはショートパンツ、スタイルがいいのでとてもお似合い。佐々木さんはカジュアル T シャツにキャップをかぶっている。安藤さんは少しは先生らしく襟付き半そでシャツだった。3 人とも以前からのお知り合いらしく鼎談といっても友人同士が酒場で好きな作家の話で盛り上がっているような雰囲気のなごやかな講座だった。安藤さんご専門の「折口信夫」から「南方熊楠」の粘菌の話までと広がり興味深い部分が多々あった。古いものを読みながらどう新しい言葉をつむぐのかが大切なこと。今ここにあり続けるという意味で言葉はある、常にあり続けるというこ

とを意識するのが大切なのだとも。心に強く残ったのは「言葉は火打石のようなものだから言葉を読むのではなく、言葉に込めたイメージをあなた(読者)に作家として届けたい」と言われたことだった。学生達の質問に真摯に答えていた3人の姿がとてすがすがしく好印象を持った。

5月24日 大江・岩波沖縄戦裁判、勝利報告会

「大江・岩波沖縄戦裁判最高裁勝利報告会」がいつもの文京区民センターであり参加してきた。家から歩いて15分ほどの距離だが今夜はやけに足どりが軽い。7時少し前に会場に着くとすでに100人くらいの人でいっぱいだった。スクリーンが設置され大江さんの勝利記者会見での映像が流れていた。そして壇上の上には「勝利報告会」の横断幕が飾られている。今夜の会は「大江・岩波沖縄戦裁判を支援し、沖縄の真実を広める首都圏の会」「大江健三郎・岩波書店沖縄戦裁判支援連絡会」「沖縄戦の歴史湾曲を許さず、沖縄から平和教育をすすめる会」の裁判を支援する東京・大阪・沖縄の3団体の共催だった。沖縄や大阪からも数十人が駆けつけてくれていた。報告者は担当弁護士のひとり秋山淳さん、岩波書店の岡本厚さん、3団体のそれぞれの事務局長、沖縄選出の国会議員赤嶺政賢さん、山内徳信さん、社民党服部良一さんその他教科書執筆者のかたなどが個々の立場で内容の濃い発言をした。今回の裁判は「歴史修正主義」の考えを持つ組織がありその人たちが全ての歴史書や教科書から沖縄において旧日本軍の非道な行為はなかった、つまり集団自決に対して軍命があった事実を消し去りたい、旧日本軍の名誉を守るために作られた「沖縄プロジェクト」のひとつの対象にされた裁判だったのだ。原告のバックにはこうした強力な組織があった訳だから決してやさしい裁判ではなかった。しかし、大江・岩波の弁護団はとて優秀で膨大な資料を読み、調べ、沖縄にもいくども足を運び大勢の沖縄の人たちから証言を集めた。またこの裁判をきっかけとして集団自決のことを辛すぎて話せないでいた多くの当事者が話す勇気を得て真実を明らかにしたという事例もいくつもでてきた。沖縄の人達が全力でこの裁判に立ち向かった事も勝利の大きな要因となったのだ。

大江さんの陳述書は小説やエッセイとは別に素晴らしい書きものとして後世に残るのではないかと秋山弁護士は語った。休憩時間に秋山弁護士の席にいき陳述者は読めるのですか？とお聞きしたのだが個人には難しいと言われてしまった。でもぜひ読んでみたい。岩波の岡本さんは勝利会見の時に報道では少ししか書かれなかったけれど、大江さんは今後の沖縄への想いもとてたくさん話されたと言っていた。「**沖縄は日本ではないところの日本人として扱われている、それは何年経っても変わっていない。少数なもの、貧しいもの、遠くにある者に困難を押しつけている。これは今原発で苦しんでいる福島の人たちと同じだ**」大江さんの言葉は重く痛く胸に刺さる。さらに「裁判の中で生存者の新たな証言が現れ、沖縄ノートで書いた私の考えを補強してくれた」と本に加筆する考えも明らかにされたということなので岩波からの発表を楽しみに待つことにしよう。会見では大江さん、とて安堵された様子だったらいい。ほんとうに良かった・・・

5月28日 第十二回折口信夫会

安藤礼二さんが主催している「折口信夫会」に行った。場所は神楽坂の毘沙門天の向かい東京理科大学森戸記念館だ。2時からの会なので少し早めにでかけ神楽坂を散策。雨の土曜日の午後なのでいつもより人通りが少ない。ル・ブルターニュでほうれん草のガレットを頼んでランチにした。う〜ん、久しぶりだけどやっぱり美味しい。大江さんもフランスで本場のガレット召しあがったことがあるかしら？

などと思いながら食す。

会場に入ると定員50人ほどの小さなフォーラムだった。受付に安藤さんがひとりおられた。これはチャンス。「大江ファンクラブの者です、先日の紀伊國屋のセミナーでご挨拶しました」と声をかけると覚えていてくださった。多摩美での講座の感想なども話し『光の曼荼羅』にサインをいただく。「お名前はなんと書きましょうか？」と聞かれたので「大江さんはいつも Yoshimi と書いてくださいます」と。その後少し立ち話。安藤さんは「大江賞を取ったことでこうして色々な方向に人のつながりが広がっていくのが面白いです」とも言われた。大江賞によってファン層も広がったようだ。時間になり「折口信夫の詩」をテーマに詩人の吉増剛造さんが「海坂(うなさか)について」発表した。吉増さんの講演は2度ほど聴いたことがある。今日もミステリアスな空気感を発する講演だった。いつものようにご自分の原稿を配ってそれを朗読していく。今日原稿は『生涯は夢の中径(なかみち)折口信夫と歩行』からだった。ループがないと読めない小さな小さな自筆の文字が原稿用紙にピッチリと赤や青や緑のペンで書かれている。それだけでもうりっぱなアートだ。それをささやくような柔らかい声で読んでいく。沖へ出て行く船をずっと見ていると、水平線に向かって 少しずつ船の姿が小さくなり、あるときにふっと 船が視界から消える場所がある。地球が丸いからそういうことになるのだけれど、その「坂」を「海坂」といった。太陽は夕日になり、そして沈むと海坂の向こうの世界をあたため、また朝になると戻ってくる。「海坂」は折口から教えられた言葉だという。吉増さんの発表は極上のアート舞台を観ているようだ。続いて安藤さんは南方熊楠が曼荼羅の構想(変化転生を繰り返す人間の心)を粘菌の生態に見いだしたこと。その思考は親しかった柳田國男の民俗学へとつながり、さらには彼の高弟だった折口信夫へと継がれ彼の宗教と文学が一体となった営為が生み出されたと話した。ふむふむ、なんだか難しいが興味深い講演だった。安藤さんは『水死』のなかでの「森森」の事を大江さんのお父様は折口信夫の講演を聴いたのではないかと推測しているが、折口信夫を熱く語る安藤さんをみていると私にもそう思えてきた。帰り際参加者を出口で見送る安藤さんと目が合ったら「じゃあ、また」とにっこり微笑んでくださった。

6月4日 九条の会

九条の会の集会在今年も日比谷公会堂でひらかれた。今日はいいいお天気で陽射しが強い。九条の会の参加者の平均年齢は65歳いや70歳かな？年配者が多いけれど皆さんいつも元気そうに活動している。カジュアルなパンツ姿が多いなか、私は水玉のワンピースにシルバーのピンヒールで参加した。だって日比谷公会堂に出入りする大江さんに偶然遭遇できるかもしれないもの。それに常にオシャレはわがポリシーなのだ。日比谷公園でお茶を飲みながら時間になるまで待つ。いつもの事だが講演会1時間前なのにすでに長い長い列ができています。当日券もあるようでそれに並んでいる人もいるらしいが、入場がなぜかスムーズにいけない。かなり待たされて公会堂に入るがすでに1階は満席。急な階段を上って2階席に行き中ほどの席をゲットする。2000人ほどの参加者で会場はすぐにいっぱいになった。「九条の会」が発足してから7年、残念なことに小田実さん、加藤周一さん、井上ひさしさんと3人が亡くなられた。講演は“未来世代にのこすもの私たちは何を「決意」したか”をテーマとして4人の呼びかけ人が、今の時点で考えておられることを話された。



大江さんは「井上ひさしさんがこの会ではいつもトリをつとめてユーモアあふれるお話をしました」と振り返り、やはり自分にはその役回りは荷が重いと話を始めた。「Articulate (アーティキュレート) : 明瞭に話す」という言葉を引用して、はっきりモノを言って抵抗する姿勢を大切にしたいと強調された。憲法前文の「決意した」という言葉を、自分の経験も交えて語った。それは大江さんが新制中学の時に先生が教育基本法を読み上げた時、共感された大江少年は思わず「よし！」と声をあげた。それにクラスの皆も笑いで応え自分も一緒に笑ったと・・・

また加藤周一さんから憲法九条の会を呼びかけないかと言われた時も「よし！」と・・・「よし！」と思った大江少年が聞いた憲法前文は「・・・平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」その「決意した」というところにかかると話された。期待していた日比谷公園での大江さんとの遭遇はかなわなかったが岩波ブックレットを 2 冊購入して帰ることにしよう。今日はいいい日だったな。「よし！よし！」

6 月 18 日 ファンクラブ読書会『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』

今年 2 回目のファンクラブの読書会。私は課題図書に『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』を推した。理由は震災後の沈鬱した気持ちをこの本で払拭する手がかりとしたかったのと、先月の紀伊國屋のシンポジウムで大江さんが渡辺先生を知るきっかけとなったのは先生の『狂気について』を読んだことだと話されたからだ。図書館で探して『狂気について』を読んで思った。大江さんはこれを読まれた青年の頃ご自分の中にある「狂気」にとらわれていたのではないだろうか？『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』を再読しそれを確信した。10 代の後半自分の中に流れる「狂気」の血筋に大江さんは不安を覚えていた。そして渡辺先生の書かれたこの部分を読まれたことで救われたのではないだろうか？「真に偉大な事業は狂気に捕えられやすい人間であることを人一倍自覚した人間的な人間によって、誠実に執拗に地道になされるものです」確かにまっすぐに心に響くすばらしい一文だ。『狂気について』の随筆は短い文章なので読書会に参加したメンバー全員にコピーを用意して渡すことにした。『われらの狂気を生き延びる道をおしえよ』は今読んでも少しも古さを感じない短編集だと思う。『走れ、走りつづけよ』のペネロープ・マンダリンのモデルはジェーン・マンズフィールドであること。「僕」と「従兄」は『父よ、あなたはどこへ行くのか？』の K に反映されていることなど再読してわかることがたくさんあった。『核時代の森の隠遁者』は原発問題があらわになった今こそ読むことに意義がある。こうした話を信頼する仲間と多いに語り合える。読書会で会うたびに思うが我が最強のファンクラブはほんとう得がたい仲間たちだ。読書会後はいつものように居酒屋でのオフ会へ。震災の事、原発の事、話すことがたくさんあり過ぎて時間が足りないほどだった。皆さん今回もおつかれさまでした。

6 月 23 日 マリオ・バルガス＝リョサ「文学への情熱ともうひとつの現実の創造」

東大文学部主催のバルガス＝リョサの講演会「文学への情熱ともうひとつの現実の創造」に行った。ほんとうは昨日大江さんもいらしたセルバンテスでの講演に行きたかったのだけれど、仕事で都合がつかなかった。セルバンテスのサイトに楽しそうなようすの大江さんの写真が掲載されていた。久しぶりの再会がおふたりにとって幸せな時間だったと想像できる。今日はいらっしゃらないのだろうか。東大の教室へは初めて入ったがやはり歴史の重みを感じる建物だ。会場の教室は 2 階で女子トイレが4階まで何度も階段を登らないといけなかった。それも個室が 2 つだけという少なさだ。この建物は文化財指定

なので改築はできないらしい。東大が建てられた当時は女性の学生など数人だったということか、そう思うと納得できるが今日はリョサ講演なので南米系の女性も大勢きていた。それに今は女子学生も大勢いる。トイレで列をつくりながら眼があう人と(数がすくないですよ)と目線で会話をして苦笑する。

講演はリョサが小説を書くきっかけとなった「密林の語り部 (EL Hablador)」の話から始められた。小説に書かれてるマチゲング族の存在していた語り部の話を聞いたのが小説



家になったきっかけだったこと。そして自分は書くことで語り部となりたかったこと。文学は時間や経験を超越未来の読み手に、また異なる言語や文化の相手にも届けることができること。ノーベル賞作家としての濃い内容の話でとても有意義な時間を受講者と共有できた。文学のように言葉がいかに豊かであるか教えてくれるものは他にない。素晴らしい本をたくさん読む事で言葉の表現というものを理解する良い読者になって欲しいとも語った。そして文学の役割は「私たちに確信、知識などを与え、世界に対する見方を豊かにしてくれる。それが変化への原動力になるし、障害を乗り越える力にもなるのだ」と結んでくれた。質疑応答で「大江さんや村上さんが反原発の発言をしているがどう思いますか？」と質問をしたかったが、挙手している人が多すぎて当ててもらえなかった。帰宅してから調べたら来日直後の記者会見で福島第一原発の事故をうけ「原子力は、経済的で安全な電力ではないことが分かった。不信感は当然で、違うエネルギー源を探すべきだ」と話していた記事を見つけた。

講演の後は東大がリョサに 6 人目となる「東大名誉博士号」(文学者では初)を贈ることが決まりその授賞式も行なわれた。名誉博士号受賞式をみるなどめったに経験できない事なのでこちらも貴重な時間だった。大江さんの講演はすでに何度も聴いているが、ル・クレジオ、高行健と続き私にとって 4 人目のノーベル文学賞受賞者の講演だった。間近で見たリョサ氏はとてもカッコイイ人だった。

6月28日「カタリココ」

千駄木の古書ほうろうでの「カタリココ」に参加する。「カタリココ」とは作家・写真家の大竹昭子さんがゲストを招いておこなうトークと朗読のイベント。今回のゲストが星野智幸さんだったのででかけることにした。古書ほうろうは谷根千(谷中・根津・千駄木エリア)ではちょっと有名なこだわりのある本屋さん。東京下町の情緒あふれる一画にある。好きな時に放浪して帰ってきたら本屋さん、というスタンスの 40 代のステキなご夫妻のお店だった。

星野さんは大江賞の「俺俺」も小説として好きだったが受賞対談での大江さんとのやり取りを拝見し、穏やかで真摯な応答にすっかりファンになってしまった。その後『新潮』7月号に掲載された岡田利規さんとの対談「現実を変容させるフィクション」を読んでさらに興味を持ちいつかお会いしたいと思っていたのだ。

脱線するがこの大江賞受賞者ふたりの対談は面白かった。「うすうす感じていましたけど、やっぱり僕たち似ているんですね」対談の最後に岡田さんが語っていたのが印象的で読みながらうなずいてしまった。思うに小説とはどうやっても作家の本質が表れてしまうわけで、大江さんが選んだ小説は作家本人も大江さん好みとなるのだろう。だから似ていて当然なのだ。などと納得しつつ「カタリココ」にもどろう。

続・yoshimi のオーケンな日々

今年で 5 年目に入る「カタリココ」は店主宮地さんが昨年『俺俺』を読んで感銘し星野さんにラブコールをして今日が実現したとのことだった。

ほうろうには店主夫妻の趣味の良いこだわりの本が並んでいる。会場は本屋の真ん中にみかん箱のようなものを並べ 50 人分の席がつくられていた。星野さんと大竹さんは今日が初対面。

打ち合わせもそこそこに対談が始まったというのに、初めてとは思えないほど話が噛みあっていて、やはり震災の時はどんな状態でしたか？から話は始まる。星野さんは震災がおきてしばらくはもう「俺俺」のような世界観は過去になるかなと思った。だけどその後をみていたら「俺俺」ではまだてぬるい、もっとあからさまなことが起こるのではないかと感じると話された。静かに耳を澄ます私達もそれぞれの 3.11 からの時間とすり合わせるように話を聞いた。その後メキシコに滞在していた時の話やサッカーの話、路上文学賞の話など丁寧に真摯に語ってくれた。終わりに「何か質問は？」とあったが誰も手を挙げなかったので「質問ではないのですがお願いがあります」と発言した。「復興書店で星野さんの小説を 2 冊買いました。そこにサインとともに書かれていたメッセージに感動したので本を持ってきてくるのですがここで読んでいただけますか？」と。島田雅彦さんを店長とする復興書店(購入金が義援金になる)で星野さんの『アルカロイド・ラヴァーズ』と『虹のクロエ』を買った。それに書かれたメッセージが素晴らしく心をうたれたのだ。「何を書きましたかね？照れるなあ」といいながら星野さんが読み終えた時、会場には大きな拍手がおこった。

「水に溶け 土に溶け 日を浴び 草となり花となり 密となり人となり 私は生きなおす 2011. 3. 11 後の生を 星野智幸」

復興書店から届いた日にこのメッセージ読みながら、すぐに大江さんの詩「私は生きなおすことはできない。しかし私たちは生きなおすことができる」が思いおこされた。イベントが終わり大江賞公開対談で渡せなかったひまわりの花束を「大江ファンクラブからです」と星野さんに届けた。そして『俺俺』に Yoshimi さまとサインをいただいた。「さっきの朗読の時間がいちばん緊張しましたよ」と笑っておっしゃった。星野さん、やはりステキな方です。

7 月 3 日 ETV特集「大江健三郎・大石又七核をめぐる対話」

3 月 15 日朝日新聞掲載の『定義集』は「【水爆経験を語り続けている人】抑止論の欺瞞、明確にあばく」と大石又七さんのことが書かれていた。その最後に、第五福竜丸展示館に大石さんの話を聞きに行くつもりともあった。今思うと不思議な思いがする。大江さんがこの『定義集』を書かれたのは当然 3.11 前の事で東日本大震災など思いも及ばなかったはずだ。この震災によって原子力発電所は大きな危機に見舞われている。大石さんは自己の被爆体験から核抑止神話の欺瞞をあばく告発に半生をささげ、原子力発電所の危険もまた批判してきた人だ。1954 年大江さんは東大駒場の掲示板に張られた新聞を読んでビキニ環礁で被爆した乗組員のひとり、1 歳年上の大石さんの事を知った。父親を早くに亡くし境遇が似ている大石さんについて話を聴きたいと思ったという。それから 57 年が経った今年 5 月、夢の島公園に展示されている第 5 福竜丸の船内で対談が実現した。

テーマは「ヒロシマ、ナガサキ、そしてビキニと、第 5 福竜丸には被爆の体験が刻まれている。日本人はその被爆の体験を未来にひらかれた思想に高めることが出来たのだろうか」。大江さんと大石さんの対談はこうして始まった。番組の冒頭で大石さんが着ているシャツを自慢する場面があった。大江さんより 1 歳年上の大石さんははっきりした目鼻立ちで年齢よりずっと若く見える。グレーと白の細いストライプ

続・yoshimi のオーケンな日々

シャツがお似合いだった。そのシャツは質の良いブロードでできていて当時の焼津の漁師のユニフォームを再現したものだそう。マオカラーシャツがお好きな大江さんも「僕もそういう丸首のシャツが好きなんですよ、その柄がいいですね」と褒めておられた。大石さんはちょっと誇らしげに「このシャツは焼津の漁師しか着られなかった。焼津の漁師は粋だったんです」と言われた。対談の内容は重く、語るにも辛いことがあつたらうがこうしたオシャレ心を忘れないお二人の心意気にのっけから共感を覚えながら番組を見た。ただ残念だったのは大江さんの美しい銀髪が乱れていた事。福竜丸に着くまでに公園を歩いて風に乱されたのだらう。スタイリストの私としては気になってしかたがなかった。女性スタッフがいないかたたらうな。現場に私がいたら・・・

福島原発事故に直面している今、まさにこうした問題意識を共有した二人が語られたことはとても意義があつた。大石さんは「**私たちがビキニで体験した恐怖を今、福島の人たちが体験している。ビキニ事件のとき、放射能と核兵器の怖さを世の中に知らせるべきであつたが、それが隠されてきた。その結果が、福島原発事故につながつた**」と語つた。大江さんはヒロシマ、ナガサキからビキニを経てフクシマに至る歴史、それと並行するこのような欺瞞の歴史を述べ、「それは今も続いている」と続けた。そして、責任を取るべき側が安全な場所に居り、逆にそれを追い詰めないという構造を「日本人のあいまいさ」であるとも表現した。

強く印象に残つたのは大江さんが話された「抑止力」に言及した部分。「**deter**」という英語には、**相手を暴力により脅かす**という意味が込められている。しかし、訳した日本語の「抑止力」という言葉には、**まるで弱者のための力であるかのような平和的なイメージが糊塗されている。「核抑止」の本来の意味は、強国の核暴力によって、弱者の平和で健康な人間らしい生活を確保するのではなく、相手を暴力で脅かして締めこませるものだ。**番組はお二人が今まで出演されたスペシャル番組の映像をうまく取り入れながら構成された素晴らしい内容だつた。「放送批評懇談会」に所属している私はギャラクシー賞の今月のドキュメント部門ベスト1にこの番組を推した。

番組を見終わったあとベン・シャーンが描いた「ラッキー・ドラゴンシリーズ」の画集を見直した。

ベン・シャーンは、第五福竜丸の事件を知り人間の尊厳を脅かすその恐怖に衝撃を受け、日本に来て取材をし、11点の連作「ラッキー・ドラゴン」シリーズを発表した。その後、「ラッキー・ドラゴン」シリーズは、詩人でエッセイストのアーサー・ビナードの文と共に 2006年『ここが家だーベン・シャーン第五福竜丸』という絵本となつた。(絵本から文章を一部抜粋)

.....

いきなり 西の空が 真っ赤に もえた。「太陽がのぼるぞおー！」と ひとりが さげんだ。

西の空の 火の玉は 雲よりも 高く あがっていた。

けれど ほんものの 太陽は 東の空に のぼる。

にせものの 太陽みたいな ばけものが うようよ もくもくと もがいているのだ。

.....

「久保山さんのことを わすれない」と ひとびとは いった。

けれど わすれるのを じつと まっている ひとたちもいる。

ひとびとは 原水爆を なくそうと 動きだした。

けれど あたらしい 原水爆を つくって いつか つかおうと かんがえる ひとたちもいる。

続・yoshimi のオーケンな日々

実験は その後 千回も 二千回も くりかえされている。
わすれたところに またドドーン！
みんなの 家に 放射能の 雨がふる。
どうして わすれられようか。
畑は おぼえている。
波も うちよせて おぼえている。
ひとびとも わすれやしない。

.....



7月10日 復興書店 シンポジウム「震災後の未来デザイン」

復興書店のシンポジウムが法政大学であった。猛暑のこんな日に外に出たら焦げてしまいそうな陽射しだった。ペットボトルと扇子を持って日曜日の法政大学へ。お堀からの照り返しが暑い暑い！イベントがおこなわれるボアソナード・タワー26階 スカイホールは素晴らしく眺めのいい会場だった。復興書店というのは作家の島田雅彦さんが店長を務めるネット上での書店。賛同している作家達の本を買うとサインやメッセージを書いて送ってくれる。そしてその代金が義援金になるのだ。人気の作家の本はすぐに売切れてしまう。大江さんの出品もあるかなと見張っていたのだけれど残念ながらなかった。そこで星野智幸さんの本を2冊購入した。今日のイベントも入場料は実費を引いて義援金に回る。こんなことで少しでもお役に立てるならいくらでも協力したい。今日のイベントは1部が「震災後の未来デザイン」と題してのシンポジウム。そして2部が作家の朗読だった。今日の作家の中におめあての朝吹真理子さんがいる。なぜかというまずは1月の芥川賞をとった『流跡』の文体に衝撃をうけていた。5月紀伊國屋セミナー「大江文学読み比べ」の発言に共感を覚えた。多摩美での公開講座でも魅了された。そして先日の『ブルータス』に大江さんとのツーショット写真(撮影は篠山紀信氏)が掲載されていたのだ。その写真は「武満徹の不在」と題され草月ホールで撮影されていた。撮影にはとてもにくい演出があった。草月ホールのステージに赤いピアノが置いてある。そのピアノは生前武満さんが奏でたことがあった。その前に座る大江さんと立ちポーズの朝吹さん。つけられたタイトルも実にうまく、いい写真だった。そこで朝吹さんに『ブルータス』にサインをもらおうと企みながらイベントに参加した。出演は、朝吹真理子、いしいしんじ、奥泉光、島田雅彦、高樹のぶ子、中沢けいと人気作家が揃った。以前ファンクラブで『アナベル・リイ』出版記念講演後のサイン会で大江さんとのファンクラブの記念写真撮影を企画したことがあった。その時私は交渉係だったのだが一緒に写真を撮りたいとお願いしたら大江さんは「撮影だったら島田のほうがいい・・・」と謙遜された。今日はじめて間近で島田さんを拝見する。過去に「文壇



の貴公子」と言われただけあって確かにハンサムひとだ。でも顔は大きいし濃いし私の好みではない、ごめんなさい島田さん、著作も読んだ事はありません。ただ復興書店の趣旨には多いに共感している。シンポジウムは作家全員が壇上にあがり震災の時から数ヶ月をどうやって過ごしてきたかを話した。一様に言われたのはすぐに文章を書くことができなかったということだった。

休憩時間になったので朝吹さんの席に『ブルータス』を持って「大江ファンクラブのものですが」と声をかけたら「私も大江さんのこと好

きなのです」と答えられた。「紀伊國屋のセミナーでとても感動しました、それと多摩美の公開講座もお聴きました」と話しながら雑誌にサインをいただく。「大江さんにはファンクラブがあるのですか？」「はいネット上で活動しています、検索していただければすぐにわかりますよ」「じゃあ、帰ったら調べてみますね」こんな会話が弾んだ。そして一緒に写真におさまってくれた。紀伊國屋セミナーのことが掲載された新聞では大江さんは朝吹さんのことを『『流跡』の中の、〈細胞液や血液や河川はその命脈のあるかぎり流れつづけてとどまることがないように、文字もまたとどまることをさげ、書き終わることから逃げて行く、しかしどこへ〉という直喩の力の強さと大きさは、今までの日本文学になかったものだ」と指摘していた。そして朝吹さんを文学をになう「新しい人」と位置づけていた。朝吹さんは文体の魅力もさることながらスタイル、ファッションセンスも素晴らしく育ちの良さをも感じるステキな女性だった。

2 部がはじまる時に島田さんの演出でタワーのカーテンがぱっと開かれた。そこには正面にスカイツリーがそびえ立ち、眼下に東京の半分の風景が広がっていた。客席からは大きな歓声があがった。2 部の朗読ひとりめはいいさんでFOILに書いたエッセイを読んだ。ふたりめは中沢さんで復興書店に寄せられたエッセイを、朝吹さんは奥泉さんのフルートの伴奏で西脇順三郎の「夏」(失われたりんぼくの実)を読んだ。奥泉さんは「桑潟浩一准教授のスタイリッシュな生活」の一節を読み島田さんは「徒然王子」の一節、トリは高樹さんが「トモスイ」の三分の一を読んで終わった。作家自身の朗読をこれだけ一度に聴いたのは初めてだったがそれぞれに個性があって感動的だった。なぜか私には今日の作家のみなさんの朗読は 3.11 から続く日々への祈りの言葉のようにも感じられた。真夏の暑い日曜日のできごと。

9月6日 さようなら原発呼びかけ人記者会見

大江さんも呼びかけ人になっている「さようなら原発5万人集会」と「1000万人署名運動」の記者会見が9月19日の集会にさきがけ行なわれた。出席されたのは大江さん、落合恵子さん、鎌田慧さん、宇都宮健児さん。会見場に行くことはできなかったが、夜のニュースやネット上に情報がたくさんアップされていて知ることができた。さすがに原発反対の声がこれだけ大きくなった今、マスコミも取り上げざるを得ないのだろう。YouTube では会見のもようをすべて視聴することもできた。会見では「経済合理性や生産性ばかりにとらわれない理念を掲げる勇気と見識を求めるとの声明を発表し野田新政権に原発の再稼働をさせないことなどを求めた。大江さんは「原発事故について日本での反応とヨーロッパの反応が、ずいぶん違う。ヨーロッパの人たちの福島原発事故に対する悪い意味での評価、どういう悲劇が起こったか、どういう恐ろしいことが起こったかの評価は、非常に大きい」と話された。そして敗戦後に作られた新憲法のように悲惨な経験から「決意して」私らは「脱原発」の法律を作れるよう9月19日の集会で政治を動かす力を示そう」と熱く語った。19日は大江さんと一緒にデモ行進するぞ！！

- 停止している原発は、再稼働させない。
- 老朽化したり、危険性が指摘されている原発からすみやかに廃炉にする。
- もっとも危険なプルトニウムを使用する高速増殖炉「もんじゅ」と、核燃料再処理工場は、運転準備を停止し廃棄する。
- 省エネルギーと持続可能な自然エネルギーを中心に据えた、新エネルギー政策への転換を早急に開始する。

9月8日 さようなら原発講演会

日本青年館で夕方からあった「さようなら原発講演会」に行った。この講演は9月19日の「さようなら原発5万人集会」に向けての講演会だ。19日は野外での集会なので発言時間も短く、静かに聴く事はできないからとの配慮から今日開催されたのだ。仕事で到着が少し遅れたつるさんと一緒に大江さんの講演を聴いた。

大江さんは鎌田慧さんに続いて2番目に登壇。冒頭に「家庭の事情で夜は外出しないので今日も順番を早くしていただいた」と話され何度も腕時計に目をやりながら30分講演をされた。きっと光さんがお休みになる時になにかお役目があるのかなあなどと思ってしまう。大江さんの好きなライトグレーのスーツに真っ白なシャツ、時々パンツのポケットに片手を入れて話す姿がカッコイイ。

大江さんの話の中でいつものように会場を沸かせた部分があった。「3.11からずっと本を読んでいる。その中にはノーベル賞をもらった時にたくさんの方が贈ってくれた本の再読も含まれている。ノーベル賞を授与した時に国から文化勲章をあげたいとの申し出があったが断った。そうしたら右翼団体が街宣車で抗議に来た。息子は大きな音に怖がるので大変困った。家内は直接その団体の隊長さんに“勲章を主人が欲しいとお願いしたのではない、あちらがどうですかというのを辞退しただけで、それは納得していただいている。ですからこのような行為は止めて欲しい”と交渉をした。しかし受け入れてもらえず抗議行動は夕方まで続いた。紳助さんは人に頼んで右翼の抗議を止めてもらえたんですね。でも直接交渉した私の家内はすごい人です」大江さんの後から話された落合恵子さんも「まさか大江さんから紳助さんの名前がでるとは思いませんでしたね」と。その時点では大江さんはすでにお帰りになっていたが、大江さんの時代を読む柔軟な感性は大いに受けていた。大江さんは定義集にも書かれた肥田舜太郎氏の『内部被曝の脅威』から引用して話を結んだ。「核には人類を滅亡させる毒がある。助かる道が見つからないまま権力者たちは核の道を通り走ってきた。しかし僕は希望を捨てません。希望は一般の人たちです。庶民が生き延びる知恵と力を得るでしょうね、生物は本能的に滅びまいとする努力をするものです」さらに大江さんが7月の定義集で書かれていた言葉が心に響く。「ともかくも私は9月19日、明治公園で開かれる<原発にさようなら集会>に出かけて、様々な新しい声を記憶してきます。」



9月15日 [戦争と文学]講演会

早稲田大学大隅講堂で行われた集英社85周年記念事業「コレクション戦争×文学」刊行記念の講演に行った。一部は立花隆さんが「次世代に語り継ぐ戦争」というテーマで話された。立花さんの事務所通称「猫ビル」は住まいが近いので時おり立花さんを見かけることがある。あの「猫ビル」の中に数万冊の本があるのか、一度覗いてみたいなあとビルの前を通るたびに思っている。講演はスライドを効果的に使いながら「戦争×文学」に収められたエピソードを引用しつつ沖縄の話からアウシュヴィッツ、香月泰男まで幅広く「戦争」のリアルな側面を話された。事前の準備を完璧になさるのだろう、とてもわかり

続・yoshimi のオーケンな日々

やすく聴く側を飽きさせない構成でうまいと感じる。近年精力的に取り組んでいる戦争の記憶を保存するための活動にも触れ、ドイツ、イギリスなど世界各地の戦争ミュージアムの充実ぶりと日本の現状を引き比べ、「戦争体験者が消えてしまう前に、戦中を肌で知っている世代の責任として、戦争の記憶を残していかなければならない」と90分の講演を締めくくった。

2部では編集をされた浅田次郎、奥泉晃他5人の作家によってそれぞれの担当部門の話があった。膨大な数の小説を読みそこから選出する苦労は大変だったらしい。大江さんの作品はちょっと意外な小説が入っている。「ヒロシマ・ナガサキ」のシリーズ(原爆投下の言語を絶する惨状。さらには水爆、原発へと拡大する現在の核状況を直視した被爆国日本のメッセージ)に『アトミックエイジの守護神』が、また「オキュパイド ジャパン」シリーズ(焼け跡のなかに闇市が生まれ、街には進駐軍のジープが走る。激変する「占領下日本」で遅く生きる人々の姿)には『人間の羊』が入った。大江さんが折に触れて紹介する原民喜『夏の花』林京子『祭り場』井上ひさし『父と暮らせば』竹西寛子『兵隊宿』なども当然入っていた。

注目したいのは大江賞受賞者の星野智幸『監獄ロック』と岡田利規、大江賞受賞作『三月の五日間』が入っていたことだ。編集委員の講演で特に岡田さんの『三月の五日間』は高く評価されていた。この小説はシリーズ分けでは『9・11 変容する戦争』(9.11以降、イラク、アフガンと今も戦争はつづく。冷戦後、変わりつつある戦争の姿をとらえた新しい文学)の部門にはいった。『三月の五日間』は渋谷のラブホテルで4泊5日過ごしている間にイラク戦争が終わっていたという話だが、新しいくりとして戦争文学の一つといえると浅田次郎さんは話された。大江賞受賞の本のオビにも高橋源一郎さんが「これはイラク戦争について日本語で書かれたもっとも優れた小説だ」と書いている。大江さんも認めている新しい感性が「戦争×文学」に入っていること、ここが従来の戦争文学集とは一味違ってすばらしいと感じた。

9月19日「さようなら原発集会」明治公園

今日はいよいよさようなら原発の集会の日だ。何人くらいの人が集まるのだろう？少し早めに千駄ヶ谷に行ってランチをしてから明治公園に向かおうと12時に千駄ヶ谷に着いた。駅の様子がいつもと違う。改札口の手前にトイレがあるのだがそこがすでに通路まで列ができています。千駄ヶ谷は仕事でよく来るので駅のまわりは勝手知ったるの場所なのだが、お目当ての喫茶店が人でいっぱいだった。サンドウィッチとコーヒーを頼んだのに30分ほど待たされる。その間にも次々と人がはいて来るので日曜日で通常より少ない店員はかなり焦っている様子だった。13時前に喫茶店を出て明治公園まで歩くが公園に吸い込まれるように千駄ヶ谷から代々木から青山から人の流れができていた。後で知ったのだがもう少し遅かったら千駄ヶ谷はホームに人が溢れ、明治公園まで繋がってしまい動けなくなっただろう。多くの人々が代々木駅まで戻ってそこから歩いたという。同じ目的に向かって大勢が歩くこの感



続・yoshimi のオーケンな日々

じはどこかで覚えがある。そうだ 2002 年の日韓ワールド杯の時に味わった雰囲気と似ている。浦和美園駅から埼玉スタジアムまでの道を数万の人が歩いていた。その時はイングランド VS スウェーデンという好カードで日本人はもとよりイギリス人もスウェーデン人もたくさんいた。それぞれに工夫をこらした仮装をしたり鳴り物をもったり、ユニフォーム姿だったり今日の空気と似ていた。そして 6 万人という人数もほとんど同じだ。ただワールド杯と根本的に違うのは今日明治公園をめざしている 6 万人は観客ではないということだ。今日の私はベッカムやオーエンを観に来たのではない。自分自身が意思表示をするために、闘う為にこの場所に来たのだ。

大江さんたち呼びかけ人の挨拶はまだ 1 時間も後なのに公園内は人で埋めつくされた。福島の被災者数百人は、「怒 福島隊」「怒 中通り隊」などのノボリを掲げて参加した。福島の被災者と連帯し、脱原発をめざすさまざまな市民グループの旗、大間や浜岡など原発立地地域の旗、社会フォーラム系労組、全労連、全労協と労働組合の全国からの旗、九条の会のグループ、市民運動系とほんとうにたくさんのノボリがなびいていた。うあ～～、これだったら「大江健三郎ファンクラブ」の旗を作ってくれば良かったと思ってしまうほど大きな団体に属していない一般の人たちが目立った。それにお子さんを連れた家族連れが多い事にも驚く。ファンクラブからも仲間は来ているはずだがこれでは探しようがない。立錫の余地もないとはこういう時に使うのだろう。なるべく大江さんがよく見えるように日本青年館の垣根のそばにやっとのことで移動する。

いよいよ呼びかけ人の挨拶が始まった。大江さんは鎌田さんに続いて 2 番目に登場。

ふたつの文章を引用されて話された。ひとつめは渡辺一夫先生の「狂気について」からだった。ああ、これは読書会の時にコピーしてメンバーに配った文章ではないか！紀伊國屋セミナーでこの文章を聞きとても感動し深く心に刻まれた一節だだった。再び大江さんからこの言葉を聴けたことに感じり身体が震えた。「**狂気なしでは偉大な事業は成し遂げられないと申す人々もいられます。それは嘘であります。狂気によってなされた事業は、必ず荒廃と犠牲を伴います。真に偉大な事業は狂気に捉えられやすい人間であることを、人一倍自覚した人間的な人間によって、誠実に地道になされるものです。**」この文章を今はこう読み直せると話した。「**原発の電気エネルギーなしでは、偉大な事業は成し遂げられないと申す人々もいられます。それは嘘であります。原子力によるエネルギーは必ず犠牲と荒廃を伴います**」



撮影 山本宗補氏

そしてふたつめの文章は新聞記事からのものだった。『原子力計画を止めていたイタリアが、それを再開するかどうか、国民投票をした。そして、反対が 9 割を占めた』その記事に対しての自民党の幹事長の談話『あれだけ大きな事故があったので集団ヒステリー状態になるのは心情としてわかる。反原発と言うのは簡単だが、生活をどうするのか』このコメントを大江さんは痛烈に批判した。もともとイタリアで原子力計画が一旦停止したのはチェルノブイリの事故がきっかけの 25 年前ということ。それから長い時間をかけて考え続けられ「国民投票で決める」ことになった。今回の福島での事故がきっかけで「反対 9 割」となったのではない。イタリアは長い年月を経て国民が「原子力停止」を決めたのだ。

『はっきりしているのはイタリアではもう決して人間の命が原発によって脅かされる事はない。しかし、私ら日本人はこれから、さらに、原発の事故を恐れなければならないという事です。私らは

それに抵抗するという、その意志を持っているという事を先のように想像力をもたない政党の幹部とかまた、経団連の実力者たちに思い知らせる必要があります。そのために私らに何が出来るか、私らにはこの民主主義の集会、市民のデモしかないのであります。しっかりやりましょう！』

大江さんの呼びかけはほんとうに心にしみる力強い言葉だった。

呼びかけ人のあいさつのあと、司会者からアメリカのノーム・チョムスキーやフランスのヌーザン・ジョージなどからもメッセージが届いていることが報告された。最後に脱原発コールを会場にいる全員で叫んだ。意志をもって参加した同じ想いの 60000 人の市民の声は感動的な響きとなって明治公園をつつんだ。

デモ行進は 3 つのコースに分かれて行なわれる。私は大江さんはきっとAコースと決め同じ外苑から青山、表参道のコースに並んだ。並んだといっても人が多すぎてなかなか出発できない。それに歩道にでると警察官がパレードを分断して思うように行進が進まない。あわよくば大江さんのすぐ後ろで歩きたかったが大江さんの姿はすでにはるか前方で影さえ見えなかった。夜になってニュースやネットで知ったのだが、大江さんはパレードの先頭を「福島の子どもたちを放射能から守ろう！」の横幕を掲げ、帽子をかぶって堂々と行進していた。しかし表情は憂い顔であったのが印象深い。福島原発事故から半年、今日の集会は原発を継続しようとする政治家・電力会社・財界との長く厳しい闘いの大きな出発点だ。この記念すべき 9.19 を大江さんと同じ道をデモ行進できたことを誇りに感じる。一千万人署名を実現し、原発の再稼働を止めよう！強く心に誓った。



10月22日 東京国際映画祭「静かな生活」「飼育」観賞

大江さん原作の映画が東京国際映画祭で2本上映された。1本は「静かな生活」映画祭に併せて伊丹十三監督作品回顧上映「JUZO AGAIN」が開催されたのだ。伊丹さんの作られた映画はすべて観ているが、やはり「静かな生活」は大江一家がモデルなので思い入れが強い。伊丹さんが亡くなってからもう 13 年にもなるんだな。コレド室町日本橋三井ホールで 1 回きりの上映だった。土曜日の日本橋はそれほど人がでていない。会場も観客はチラホラ。ど真ん中の席を確保して久しぶりに「静かな生活」を観た。タイトル通り、静かに時が流れていくようにゆっくりと物語は進んでゆく。両親が仕事で海外に行ってしまった留守中、家を守ろうと頑張る長女の物語で、知的障害の兄の面倒を見ながら過剰に心配してしまい、行動が空回りするマーちゃんの奮闘記だ。以前に2回観ているのだが忘れていたところがたくさんあった。物語が絵本作家をめざすマーちゃんの描く本から進んでいくことも思い出した。光さん作曲の音楽と透明感溢れる自然光を多用したカメラワークが美しい映像を作り上げている。

注目は何といってももうひとりの主人公イーヨーを演じた渡部篤郎の演技だ。彼はその年の日本アカデミー賞新人賞と優秀主演男優賞をこの役でとっている。ビデオの特典映像で撮影現場に見学に来た光さんが「あれは僕ですね」「いい帽子を被っています」と渡部篤郎を見て言った場面があった。光さんが認めるほどイーヨーの演技は卓越した光を放っていた。

ほのぼのとした流れの中で兄妹の生活が描かれていくが、そこで扱われる事件の内容は大江作品らしく極めてダイブで生臭い。そのギャップがこの映画の面白いところだろう。イノセントなイーヨーを必

続・yoshimi のオーケンな日々

死で守るマーちゃんが新井に乱暴されかけた時、イーヨーは猛然と妹を守る強い兄になる。雨の中ずぶぬれになりながら抱き合うふたりのシーンは感動的だった。「この映画を通じて若い人に真剣に生きる事のカッコ良さを知ってもらいたい」これが伊丹監督のテーマだったという。

そしてもう1本は「飼育」。これは大島渚監督作品ではなくリティー・パニユ監督のカンボジアを舞台にした「飼育」だ。大島版は観ていないのだがこのパニユ版「飼育」はとても良かった。冒頭からベトナム空爆の本物の映像が映しだされ迫力ある場面が広がる。1972年カンボジアの地図にも載っていない小さな村で墜落した黒人兵が村の少年達に捕まる。その兵士を監視しながら子供達が革命や軍に巻き込まれていく状況がリアルに描かれていた。そのリアリティーは黒人兵士と革命軍のリーダー役のふたりだけがプロの俳優で、あとの全員が現地の人たちで構成された映画だからだった。少年や村人の演技が素人とは思えないほど自然で説得力があった。この「飼育」は時代や場所は違ったが、大江さんの原作にかなり近い印象だ。はじめは「獣」のような扱いをされる黒人兵も鎖を解かれ、少年達と心を通わせて夕日の原っぱで紙飛行機を飛ばしたり、川で魚を捕ったりする美しいシーンも描かれている。終盤は原作とは内容が違っているが、大江健三郎原作『映画飼育』として納得できるつもりだった。パニユ監督は大江さんのことを「文学作品の中で原爆反対だとか、平和主義だとかをはっきり宣言している。その人道的な活動ぶりを非常に尊敬しています」とインタビューで語っていた。大江さんはこの映画をどのように観賞されたのだろうか？お逢いして感想を聞いてみたいものだ。



これ以降も「yoshimiのオーケンな日々」は続っていますが原稿の締め切りがあるので今回はここでやめにします。2011年の「オーケンの日々」では9月19日の「さようなら原発・明治公園集会」がいちばん心に残っています。反原発の想いを共有する6万もの人が集まったこと。大江さんの後ろで(ずっとずっと後ろでしたが)デモ行進が一緒にできたこと。そのことがいつも心に寄り添うように大江作品を読んできた者として、大江さんの言葉に耳を傾けてきた者として、とても嬉しくまた誇りに感じられました。

最後に表紙用にと何パターンか撮った写真のなかでどうしても紹介したい写真があります。ロケ地は大江さんとも少しはご縁のある建物です。近代的な匂いのするこの場所に本をセットしファインダーをのぞくと回廊の先に1本の樹木が見えました。それはまるで未来にも必ずある「自分の木」のようにも見えました。さらにそのまわりで「本を読む喜び」を知るたくさんの子供達の顔が浮かんできました。没にするには忍びないので裏表紙としてこの写真を残します。

未来を生きなおす「新しい人」たちに贈る写真として・・・

text & photo by yoshimi

庭仕事の愉しみ

イオ

『庭仕事の愉しみ』はヘルマン・ヘッセの晩年の本のタイトルです。

晩年を迎えるにはいささか気の早すぎる私ですが、数年前から始めた、図書館の花壇のボランティアが私の暮らしの中で欠かせないものになってきています。

当時ひきこもり系図書館ヘビーユーザーだった私は、行きつけの図書館の花壇が、荒れ果てたままに放置されているのを見て、なにかしら共感し、こっそりミントなどを植えつけ、すこしづつ陣地を拡大し、いつの間にか、施設のスタッフの人にも知られ、じょじょに「馴染み」になって、いまではほぼ公認されるというところになりました。

普通ボランティアといえば、誰かほかの人のためになることをすることですが、この庭仕事は、なにより私自身のためになっているという気がします。スコップで深く植え穴を掘っているときなどに、人に「あなたは誰」問われれば、「ボランティアです」と答えるしかなく、表向きボランティアということで、私の行為を説明しているというところもあるわけですが。

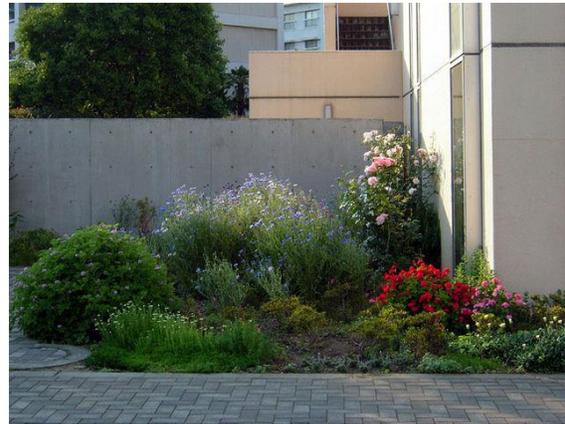
気分がすぐれないとき、特別の仕事がなくても、私は花壇に足を運びます。そして花がら摘みぐらいのことをして、あとは花壇を眺めるばかり、といった過ごし方をします。

土や植物と触れ合うことは、どこかしら人を落ち着かせる効果があるようで、これはもう、ひとつの処方箋といってもよいものだと思います。

そして、そんなふうにして、土や植物と触れ合うなかで、人との良いふれあいを持つこともできました。

写真手前右側の、赤とピンクのゼラニウムはいた

だきもの。去年の秋にはスイセンの球根もいただいたので、春には花を咲かせてくれると思います。



いただきものは植物だけではありません。

夏の暑い日、通りすがりの女性が一本のきゅうりを差し入れてくれたこともありました。

しかも、あんなにきゅうりを美味しくそうに食べる人を見たことがないと、家に帰ってあらためて三本のきゅうりを持ってきてくださりもしました。

できれば、きゅうりを食べる以外のことでも人に感動を与えたいと思う年頃ですが。

さて、春先の花壇はヤグルマギク(和名でいえばヤグルマソウ)でいっぱいになります。こぼれ種で毎年自然と青、紫、ピンク、白と四色ほどのグラデーションを作り出し、秋のコスモスと並んで、花壇の見どころのひとつになります。

写真は2007年の5月に撮ったもの。

ミクシィの日記に、私はこんなことを書いていました。

『…たぶんヤグルマギクのつぼみ(推定)

この花も最初は雑草ぼくって、抜いてやろうとも

庭仕事の愉しみ

思ったのだが、いづらか特徴的な葉の形をしていたので残しておいた。

正解である。』

じつに正解であったと思います。



花がたくさん咲くころは、自然と声をかけてくる方も増えるのですが、初老のご婦人の言葉がある広がりをお私にもたしました。

女性の言葉は、自分が子供の頃は、あちこちにこの花が咲いていて、学校へ行く途中に摘んでいったりもした、というもの。

さかりの頃の、無数に重なりあい、空間を埋め尽くす勢いのヤグルマギクの花の印象、それ自体も無意識に働いたのか、このとき思い出したのが、『人生の親戚』の、濃密という言葉についての部分でした。

目の前のヤグルマギクと子供の頃のヤグルマギク、二つを重ねて、この方は、私よりも濃密に、この花を味わっているのだとそのとき私は思いました。

今この文章を書きながら、むかしの写真を眺めて、なにやら過去を振り返った私は、今年の春には、過去の写真とその頃の暮らしを目の前の花に重

ねるようにヤグルマギクを眺めるようになるのだろうと思いました。

おおむね花壇とはそのようなものかもしれません。

大江さんの好きなフィリパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』において、少年と少女が時間をともに過ごす場所が、庭＝ガーデンであるのは意味のないことではないと思います。

さて、12月に入ってから、ぼちぼち冬の花壇仕事をはじめましたが、このところは休眠期に入ったバラの手入れを続けています。ツルバラの誘引と木バラの剪定を終えて、あとは寒肥をやるばかりということではまずは一息つきました。

根が動く前にというのが寒肥をやるときの基本なのですが、冬来たりなば春遠からじということで、剪定を終えた、アプリコットオレンジの柔らかないろあいの花を咲かせる「ジャストジョーイ」の赤い芽が膨らんできています。

い、急がねば、ということもあるけれど、まずは、リジョイス！



大江作品から受けた励まし

タカコ

心の中に漂っている大江作品への思いを言葉にして伝えたいと思い、今の自分に必要と思う何冊かの本を再読しメモのようなものを書き散らしたが、伝えたいことは形になってこない。小森陽一が「星座のように一つ一つは星として輝きながら見渡すと大きな星座として圧倒する光を放つ」と言っているように、大江作品の一冊ごとに心の深いところを触れられて感情を解放された経験を重ねた私の中に、読み繋いできた本が輝いていて各作品について書いてみても思うように伝えられなかった。

思いあぐねていたら「群像」に新しい小説「晩年様式集」が、「新潮」に朝吹真理子さんとの対談が掲載された。待望の新しい小説を読み進んで「ドキリ」とした。若い詩人の言葉の大江さん訳 <求めるなら助けは来るしかし決してきみの知らなかった仕方>。私には学生の頃シスターから教えられ自分に言い聞かせるようにして生きてきた言葉があった。「神様は必ず必要な助けを下さる。でもそれは人間の思いを超えたやり方で。」

私の父は北海道で高度経済成長と共に成功した会社を一族で経営していたが、若い頃の結核で病弱なうえに精神に大きな波のある人だった。同族会社にありがちなもめ事が絶えないうえに、同居していた祖父母を含め病人の多い家だった。その様な環境の中で私だけはとても元気な子どもとして育ったが、幼いながら人生は悲しく苦しいものと感じていた。中学から寄宿舎のあるカトリックのミッションスクールに進学し家を離れた私は物理的に家から解放されたと同時に、精神的には思春期らしく「生きる意味」を模索して葛藤していた。そして中学3年の時、カトリックに出会い洗礼を受けた。それ以降カトリックを生きる支えとした私だけけれど、長い年月の間には出口の見えないような苦しさにも直面し、信仰によって答えはそこにあると思いつつも何か別のカタルシスを渴望する自分を感じていた。

大江健三郎という名前を私が最初に強烈に心に刻んだのは立花隆がインタビューをしたNHKの番組だった。光さんとの「くいな」の話にやはり私は「ドキリ」としたのだ。この時私は、今大切なものに出会っている、と感じながら番組を見ていた。先に「カトリックと出会い」と書いたが私には明確にあの時「出会った」と言える瞬間がある。それはまだミッションスクールにいながらカトリックのことを何も知らなかった中学3年の時、若くして亡くなってしまった親友の父の追悼ミサの最中、神父が聖体と呼ばれる「キリストの体」と考えられているパンを食べるときの祈りの言葉 を聞いた瞬間だった。「主よあなたは神の子キリスト永遠の命の糧、あなたをおいてだれのところへ行きましょう」この言葉が胸にズシンと来たのだった。そして同じようにNHKの番組で大江さんと出会ったのだ。

私には言葉が必要だった。それがカトリックであり、大江さんだった。大江さんとの本当の出会いはそれから6年ほど時間がかかった。通信1号に書いたように『取り替え子』を読んで大江さんへの入り口を見

大江作品から受けた励まし

つけたのである。でもその待った年月さえも「知らなかった仕方」での私への助けと今は感じられる。いつも助けは あらゆる場面で私の思いを超えていた。

神がもし本当にいるなら、なぜこれほど苦しいことをお許しになるのか。沈黙に感じられる神に信仰を持つ者でも無力感を感じることは多い。しかしそれでも私が今や短くもなく生きてきた人生で実感として持っているのは先の詩人の言葉であり、シスターからの言葉なのである。そして苦しかったことに直面しているその時にはわからなかったけれど、後に振り返ると私には必要な経験であったし、あらゆるやり方で助けられていたと感じる。

大江さんの小説には絶望的な事件や出来事が多く描かれている。例えばまり恵さんの人生や精神を病んで亡くなったタカチャン、殺人犯となってしまったギー兄さん、でもそこで描かれている苦しい人生を読んでも、読み終えた後私たちに残るのは絶望ではなく力を与えられる言葉である。

「新潮」の朝吹さんの言葉を借りたい。

<私の身に起こるクライシスはとても小さなことですが危機に瀕したとき大江健三郎を読みます。ネガティブで情緒的な方へ身を委ねたくなるのが人というものですが、それに何とか抗いたいです。大江さんの作品を読み、自分なりの想像力を持っておし拡げてゆく課程そのものが意志を持って現実と向き合うための準備になります。絶望を引き受けたうえでそれでもポジティブに生きる意味をもちたい。3月11日以降も大江作品を読み返していました。考えることはここからはじまると思いながら読んでいました。>

深く大江作品を感じるために私にはたくさんの経験が必要だった。だから私の娘程の年齢の人がこのように大江作品をとらえていることに驚嘆し、この朝吹さんの言葉が大江さんの作品の普遍性をあらわしていると思う。

<いつまでも循環する時に生きるわれわれへ向けて、僕は幾通も幾通も、手紙を書く>

私は大江さんから幾通も手紙をもらい、たくさんの「ドキリ」とする言葉を伝えられ、若い頃には「知らなかった」多様な困難がやってきた 40 才以降の人生を元気を出して乗り越えてきた。私にも Late Style と呼べる晩年の生活があるとするなら、さらに今はまだ知らない困難がやって来たとしても、大江作品が手を伸ばせば届くところにあって読み続けられるなら、他は祈ることしか出来なくなっても幸福と言える最後の時間を過ごせるのではないか、そんなふうこれからやってくる老年の日々を迎える勇気を与えられている。

今年も新しい手紙を待ち続けている。

大江文学に励まされた時代

真春

私は一九九十年に乳癌の手術をしました。

その時は今自分が息子を残して死ぬ訳にはいかないと思いこんで居ましたので「個人的な体験」で読んだように人間の生と死を「火見子の多元的な宇宙」の理論をあてはめながら気を取り直したり迷ったりしながらも何とか生き延びました。

八年後「再発骨転移」が見つかり余命告知を受けました。絶望して気力も無くし、かろうじてCDと本を傍に置いて寝ている日が続きました。でも、やっぱり自分が居なくなった後の息子のことばかりを心配していました。

同じ障害の子を持つ友達が電話してくれて、「人生の親戚とは苦労か苦しみをさすと読んだ事があったと言ったでしょ、でも親戚は多かったけど私達は決して不幸では無かったとも話したでしょ、気をしっかり持って家族と向き合うのよ」と励ましてくれました。

改めて、大江さんの「人生の親戚」を読み始め「まり恵さん」が生きている毎日を考えました。自分一人が死ぬのは覚悟も出来るし、寿命だと諦めも出来るけれど自分の息子がその様な行動を起こして居なくなってしまう。まり恵さんが経験した事は私がどのように考えても自分を治める事が出来るとは思えませんでした。我が子が自分の意思を固めて死のうとする、その事を考えると走り出したいのを我慢するのが精一杯だと私は思うのです。

まり恵さんは、子が障害を持って生まれたのは 悪、では無く 事故だと考えていた。でも二人の子を取り上げられたことは、悪、がなされた、と思った。まり恵さんは自分の家を売り「自分達の人生は失敗だった」と夫と別れる。まり恵さんは、日常の生活も出来ない日が続く。二人の子を死に追いやったと責任を感じて罪の意識を持つ。二人の最後を思うと地獄の日々、精神の脱出、メキシコ行き、息子達が生きていた事を忘れないで居るために、これ迄決して自分がしなかった事をして生きる、このような言葉の一つ一つが寝ているだけの生活だった私に、ナニクソ と起き上がらせるように迫りました。



大江文学に励まされた時代

「死ぬだろう」と言われたけれどまだ死んでない、動けなくても息子のために出来る事は有る筈だと可能性を探りました。自分が今まで決してしなかった事は何かと考え続けて、考えついたのが、「ホームページを作って息子の作品を一人でも多くの人に見て貰おう」でした。

機械など思いもつかない、炊飯器の水加減も手でする私が「パソコン買ってホームページを作る」と言い出すと周りが驚きました。主治医の先生が「したい事は何でも言いなさい、今なら大抵の我が儘は聞いて貰えるから」と言った通り、パソコン一式買って貰い友達のパソコン得意な息子さんに教わり始めました。家族は、やり始めると熱中して一日7時間もパソコンに座っているので上手く出来ないストレスと体調を心配しましたが、私は、朝起きると考え続けて生きる張り合いが出来ました。基本的な4ページでサイト「動物工房」がパソコンに写った時は大喜びしました。



ネットを繋いで直ぐに「大江健三郎ファンクラブ」を探して入会しました。其処には今までの大江さんの作品の事、今大江さんが活動しておられる事など身近に感じられる情報が詰まっていました。

「ファンクラブ」から、大江さんの講演会がある事を知りましたので勇気を出して皆さんに会えるのも楽しみに行きました。講演終了後の記念写真は思いがけ無い事に個別に大江さんとご一緒できたのです。大江さんを真ん中に付き添いの夫と共に記念写真、その後、サイン会では大好きな「MTと森の不思議」に「共生」の文字と「大江健三郎」とサインを頂きました。

心弱くなってもう頑張りがたくなと思う時、写真とサインが私の心を引き戻しました。「ファンクラブオフ会」が私の体調を整える最優先順位になり、早稲田から高田馬場まで歩く事が出来るようにと歩いたりして鍛えています。今迄「飼育」から読みながら語り合う機会が無かったけれど、ファンクラブのオフ会では全員が大江文学を語り、自分一人で読んで居た時は感じられなかった行間を深く読み解かれ、視点を変えた解説に感動があり生きている事を喜びました。「定義集」、大江さんがこの子たちにも分かるように世の中の事を定義して書いて下さると知ってからは言葉に拘る子を持つ親として助かった、と安堵するようでした。

私の人生に大江さんの本を通して結ばれた大切な友達が出来ました。これから先も「大江ファンクラブ」に参加出来るように自己管理をしっかりして読書会に行きたいと思います。

大江さん、ありがとうございました。 中村順子(真春)

『我らの狂気を生き延びる道を 教えよ』 ニューヨークより

金田善裕

大江さんが「さようなら原発 5万人集会」を開いたのが昨年(二〇一一年)の九月十九日。その日、ぼくはニューヨークで行われた、二日前のデモのことを思い出していた。そのデモは日本語に直訳するならば「ウォール街を占拠しよう」(Occupy Wall Street)という名前で大きなニュースとなっていたのだ。日米で同時に起こった大規模デモ。一方は反原発、もう一つは格差社会と戦うとその主旨は大きく違うが、ほぼ同時期に日本をアメリカ全体を揺るがすような政治的行動が行われたことに奇妙な共時性を感じたのだった。

一つ異なったことは、そのデモの目指すものだった。アラブの春、エジプト革命のように、当分の間、金融街近くのズッコティ公園に寝泊まりを続け、全米、あるいは全世界への広がりを目指すというのだ。ズッコティ公園はエジプト革命の舞台となったタハリール広場だという。公園で寝泊まりを続ける若者の話を聞きながら、その荒唐無稽な空想のような物語に、内心、いつまで続くのか、そんな疑問を禁じ得なかった。

大江さんの小説には『洪水は我が魂に及び』に登場する自由航海団を始めとして若者たちのカルト的な政治集団、宗教集団が登場するが、まさにそのような荒唐無稽の夢を背負った若者たちの登場として映ったのだった。第二週の土曜日に集まったデモ参加者は二〇〇〇人。十七日のデモから一週間で、その規模は倍に膨らんでいた。取材者として関わろうとしたぼくはデモ隊に張り付いて祝祭ムードに包まれたアメリカの春のようなものを見ていた。そして、一つ印象をとして残ったのは大江さんの描く若者集団が絶えず孤立無援の他から認められることのないドン・キホーテのような戦いを強いられるのに対して、ニューヨークのデモ集団はただストリートを埋めつくすのではなく、通行人に、通りを挟む窓からの傍観者たちに、観光バスの中の観光客に積極的に手を振り、プラカードを見せ、自分たちの主張をととも上手にアピールすることだった。そして、支持、応援を引き出していくのだった。それは大江さんの小説、そして日本の従来のデモにはない開放系の黒人差別撤廃、ベトナム戦争の終焉を獲得したアメリカの運動だった。デモ終了後にはノーム・チョムスキーの支持を得たという報告が参加者全体に流れた。十月に入って運動は全米に拡大し、Occupy という言葉は今年の流行語として第二位の座を得ることになる。アラブの春を実現するという若者たちの言葉は数ヶ月で半分は現実のものとなったのだ。

「ウォール街を占拠しよう」運動についてはいくつか目立った指摘がある。一つはノーベル経済学賞受賞者の経済学者、コロンビア大学教授のジョセフ・スティグリッツが昨年五月「ヴァニティ・フェア」誌に発表した論文「Of the 1%, by the 1%, for the 1%」の中に書かれた1%の富者が国内資産の40%を

持つという指摘からの影響。「ウォール街を占拠しよう」運動の若者たちは自らを九九%と呼び、1%の富者と戦う。経済正義(Economic Justice)を主張する。ちなみにスティグリッツ自身も四三年生まれの団塊の世代だ。

もう一つは六十年代の運動との比較で、よく語れるのはズッコティ公園がさながら六十年代のヒッピー文化、学生運動のようだという指摘である。実際に公園では食事が無料配給され、無料図書館などが設営されている。一つの共同体形成とその実践はハキム・ベイの語る一時的自律的ゾーンとして存在している。六十年代との違いは「ウォール街を占拠しよう」運動にはリーダーがないことである。マルクス主義運動から市民運動、さらに言えばシアトル暴動以来のアナーキズム運動と密接に結びついた現在の若者たちの政治動向があるのだろう。現在の運動が格差是正という経済制度に対する運動であることも大きな違いだろう。長期間に渡り不況に苦しむ国際社会の中で、この運動の必然性を持つ国は多い。

運動自体の進め方として直接民主主義を採用し、なおかつ目指しているところも特徴だろう。イラク戦争とその後の米軍の駐留の経済的負担にあえぐアメリカにとって、ブッシュ政権のもたらした傷は大きく、政治の無能を知った若者たちの直接民主主義志向は政権交代をしても変わらぬ愚かさを続ける政治家を抱く日本の若者たちにもやがて大きな影響を及ぼす気がして仕方がない。

ここから私的なことを語りたい。彼らがズッコティ公園で寝泊まりを始めたその二日後、ぼくは中国人留学生から土曜日に大規模デモが起こったことを知らされた。安アパートの一室に帰ったぼくは彼らの映像を公式サイトを通して配信されるインターネットのライブ映像で見ることになる。一日中続くツイッターでのテキスト配信、映像配信、その技術力は驚きにあたいするものだった。オルタナティブな勢力のものにしろツイッターにしろ、すべてすでにあるインターネットのツールを上手に利用する、または、まかなう、そのやり方に舌を巻いていた。

翌週、ぼくはその中国人留学生とデモを取材に出かけていた。参加者は九月十七日の初のデモの倍、二千人だった。祝祭ムードに包まれたニューヨークのブロードウェイ・ストリートを歩いた。九月の明るい日差しの中、参加者たちの意気は上がっていた。だが、取材のつもりで遠巻きに追いかけるぼくは警官にデモ隊の中に入れと強制され隊列に加わることになる。デモ隊の取材は正式に届け出をした人間のみ許されるらしく、ぼくのような者には与えられない。報道の身分証明書を下げているデモを遠巻きにする取材者はみなデモ隊と歩くように強制されたのだった。デモ隊を指揮する若者たちはデモのリードにすでに慣れており、新聞報道のように何も知らない若者たちが始めたというよりも、デモの方法に熟知した安心感の持てるリードに信頼を寄せることができた。しかし、行進を始めて二時間、ワシントン・スクウェア公園近くにたどり着くと、警官の持つ大きな網で囲まれ、その先頭にはぼくはいた。少し焦りがあった。というのは後ろをデモ隊で囲まれ、事実上身動きのとれない状態で警官たちがもし何らかの措置に出れば一番初めの犠牲者はぼくになるからだ。学生ビザでこの国に滞在する者には何かあればビザの剥奪をも覚悟しなければならない状況だった。その懸念は少し正しかったことをぼくは後から知る。ワシントン・スクウェア公園でデモ隊と別れ、ピザを友人と食べていると何隊かの警官の集団が大きな声を上げて走っていったのだ。ピザ屋を出て何があるのか確認しようとしたぼくは遠くに警官の後ろ姿を見るだけだった。その直後に、あるいはその時、警官はデモ隊を先ほどの網で取り囲みペッパー Sprey を浴びせ、大量の逮捕を行ったのだった。ピザを食べて、デモの終点の公園に戻ると

『我らの狂気を生き延びる道を教えよ』 ニューヨークより

当初のムードはすでに消え、やるせない失望感が公園全体をおおっていた。先ほどアジア人は珍しい、ぼくが二番目の参加者だと声をかけてきた若者は、ぼくの挨拶におどおどした身振りを見せた。明らかにデモの途中で消えたぼくをおとり警官ではないかと警戒しているのだ。その日、取材を終え、地下鉄の駅まで歩くぼくに、話しかけてきた同世代の女性参加者は、デモは分かるが逮捕されるために来たわけでないかと疲れを隠せなかった。

その後、ぼくは自分の通う大学近くで行われている、この運動に近づこうとはしなかった。テレビ観戦する野球ファンのように自宅の一部屋の中で、映像配信を見るだけだった。しかし、運動は大量の逮捕者を出しつつ大きく拡大していくのだった。それにともない、十一月に入り、ズッコティ公園での寝泊まりを法的に禁じられた彼らは拠点を少し離れた公園に移すことになる。その日気が向いたぼくはデモに参加しないことを自分に課し大学帰りに寄ってみると、そこで見たのは全米に、全世界に拡大した人種も性別も年齢も多様化した、ありとあらゆる運動の参加者が集った大規模デモだった。デモ隊を見続けるぼくの前で、三〇分以上途絶えることのない参加者の数に驚かざる得なかった。

最後に「ウォール街を占拠しよう」運動は大きく米国社会を揺るがす運動に成長した。だがその裏で、大きく逮捕者を出していることが懸念となる。今年後半の大統領選を控え、目立った候補者もない予備選が続く中、明らかにこの国の人々はオバマ大統領を始めとして既成の政治家に支持を与えていない。光があるとすれば、この若者たちの動きだけではないかとも見える。しかし、行政府と警察は武器を持たない非暴力の若者たちを毎回数十人から数百人規模で逮捕し続けている。新しい者たちは古い者たちの、そして、その無能さゆえの呪縛の中でいまだにあえぎ戦い続ける。しかし、この運動を摘み取ってしまっているのか。どのような意味があって圧政を続けるのか。思い出されるのは『我らの狂気を生き延びる道を教えよ』という大江さんの言葉である。若者たちは今なお狂気によって押し潰されようとしている。この構図は四〇年以上たつ今も全米に存在し続けている。

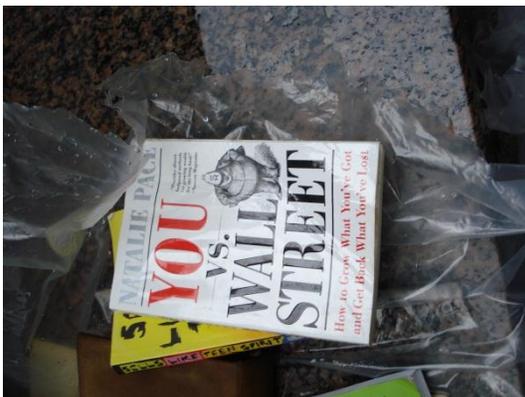
OccupyWallStreet

<http://occupywallst.org/>

Joseph E. Stiglitz

Of the 1%, by the 1%, for the 1%

<http://www.vanityfair.com/society/features/2011/05/top-one-percent-201105>



公園内に作られた青空図書館にあった一冊。彼らの登場以前にウォール街のおかしさを物語る前史があったことがわかる。

『我らの狂気を生き延びる道を教えよ』 ニューヨークより



ズッコテイ公園に泊まり込んだ参加者、デモ参加者のための無料の食事。ぼくが参加したデモの後はドーナツだった。寄付によって資金を集め、食事の提供をしている。



デモの前にプラカードなどをめいめい用意する参加者たち。段ボールを一枚だけ持参して会場内で言葉を書き入れる、装飾する参加者も多い。デモの後は持って帰る。



ズッコテイ公園の一角。ゼネラル・アッセンブリー(general assembly)という名前の小集会をしているところ。話したい人間は「マイク・チェック」という声を上げて手を上げる。発言した人間の言葉は聴衆全体で復唱され、スピーカーを使わず集まった人々に伝わる。拡声器を禁じられた上でのやり方だ
目の前はニューヨークの目抜き通りブロードウェイ・ストリート。ウォール街ははす向かいにある。中央の赤い停止信号に縁取られた写真は、連邦準備制度理事会(米国の金融政策などを決定する)のバーナンキ議長。



中央、遠景の中に立ってアピールする参加者。



目抜き通りブロードウェイ・ストリートを行進するデモの先頭。アメリカではデモとは呼ばず、マーチ(行進)と呼ぶ。若者中心と呼ばれるウォール街を占拠しようの参加者だが、中高年、高齢の参加者、女性参加者も多い。人種から見ると白人層中心で黒人、アジア人が少し混じる。アジア系の参加者は少ない。

ファンクラブ活動報告

2011年の活動概要です。(いとうくにお)

- 1月18日 大江ファンクラブ通信2号完成
- 1月29日 早稲田奉仕園にて『性的人間』の読書会(内容は本号に掲載)
高田馬場「土風炉」にて新年会
- 5月19日 大江賞受賞公開対談に有志が参加
- 6月18日 早稲田奉仕園にて『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』の読書会
高田馬場「土風炉」にて親睦会

編集後記

本来なら2012年の1月に完成する予定だった本号。僕の怠慢で1年延びてしまいました。タイムリーに出せなかったことを関係者の皆さんにお詫びします。

この遅延により、2011年はすでに「一昨年」ということとなりますが、この年は東日本大震災とそれに伴う福島原発事故によって歴史に刻まれることとなりました。この戦後最大といつてよい惨事から私達は、多くのことを学びましたし、いまままだ学びつつあると思います。大きいくりで言うなら、その一つは、国は必ずしも国民の安全を第一に考えるわけではないということ、もう一つは、国やマスメディアから送られてくる情報が必ずしも信用できないということ。その両方を象徴的に示すのが、「原発は安全だ」といういわゆる安全神話です。危険を具体的に指摘する声は国会、学会を含めさまざまなレベルで存在したのに、国も電力会社もマスコミも、その多くが原発は安全だと言い募っていた。そして、2013年現在、まるで福島原発の事故がなかったかのように安全神話は復活の兆しを見せています。

そのような状況に対する国民からの抗議の声は、昨年から毎週金曜日に官邸前で行われている反原発集会という形で表れています。このかつてない形の運動は、本誌で金田さんがレポート(p.41)している「ウォール街を占拠せよ」を思い起こさせます。また、大江さんが呼びかけ人の一人となっている「さようなら原発1000万人アクション」も、大規模な署名、集会、デモを実施してきています。ほかにもさまざまな場所や規模での運動が続いています。yoshimiさんの記事にあった9月19日の集会での大江さんの言葉、「そのために私らに何が出来るか、私らにはこの民主主義の集会、市民のデモしかないのであります。しっかりやりましょう！」(p.33)を思い出すなら、全国の反原発運動に大江さんの行動と言葉は大きな励ましを与えるものだといつてよいのではないのでしょうか。そのような作家のファンでいることに誇りを覚えないではいられません。(いとうくにお)

大江健三郎ファンクラブ通信 第3号

編集 いとうくにお

撮影/アートディレクション yoshimi

発行者 大江健三郎ファンクラブ・いとうくにお (kunio-i@ops.dti.ne.jp)

発行日 2013年1月31日

